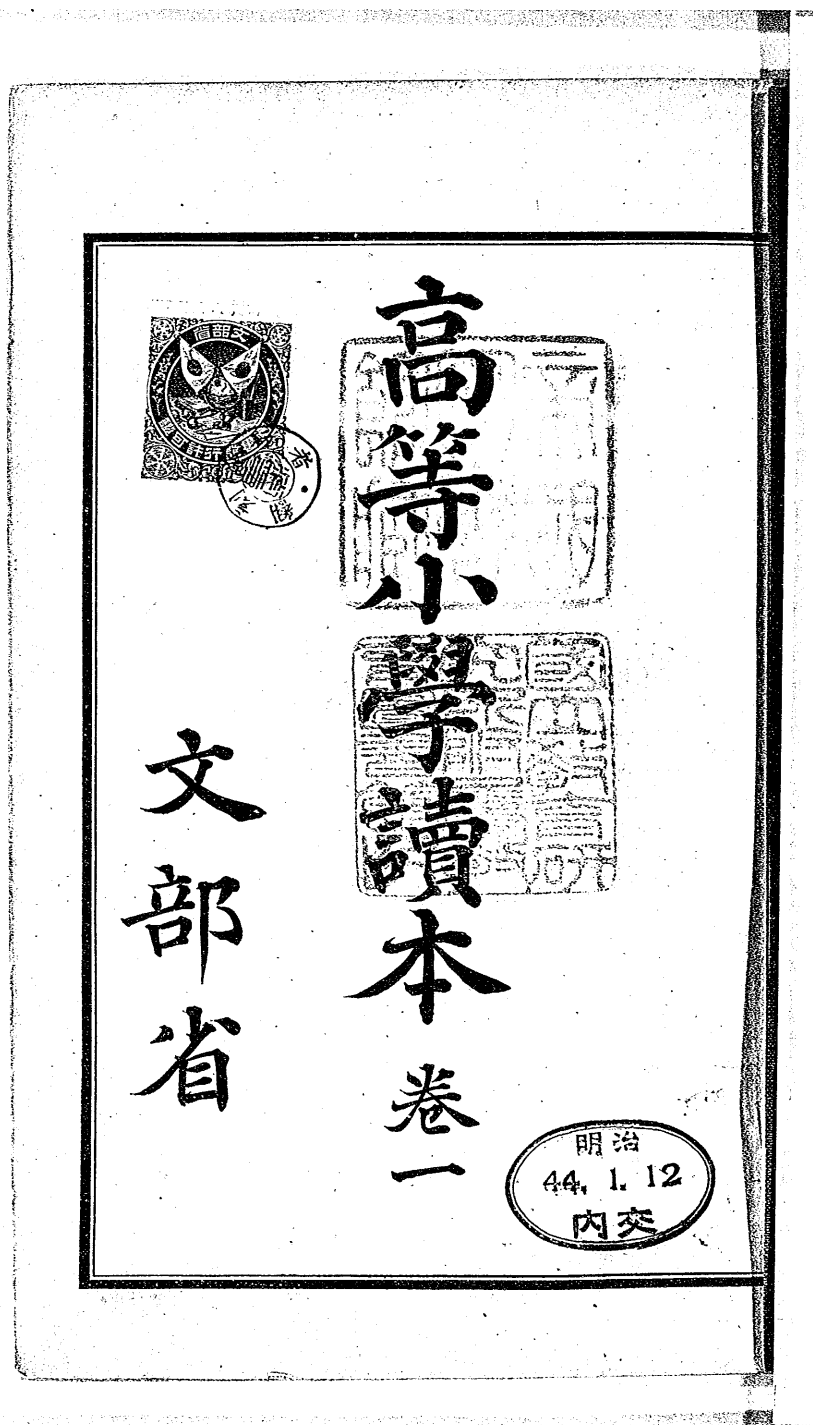




D|3

2|3|5



目 録

第一課 艦上の威仁親王殿下……………	一	第十六課 水遊び……………	六十四
第二課 足柄山……………	五	第十七課 資本……………	六十七
第三課 眞の知己……………	七	第十八課 盲啞學校……………	七十二
第四課 故郷……………	十二	第十九課 言語……………	七十八
第五課 布哇通信……………	十五	第二十課 熱帶地方の果樹……………	八十二
第六課 公園……………	十九	第二十一課 象狩……………	九十
第七課 頼山陽……………	二十四	第二十二課 傳染病……………	九十四
第八課 關原合戦……………	二十七	第二十三課 軍馬の忠義……………	百二
第九課 武器の變遷……………	三十三	第二十四課 萬里の長城……………	百五
第十課 日本海……………	四十一	第二十五課 共進會の模様を報ずる手紙……………	百八
第十一課 西比利亞鐵道……………	四十五	第二十六課 四季の月……………	百十四
第十二課 ベートル大帝……………	五十	第二十七課 盗人を誡む……………	百十六
第十三課 風……………	五十五	第二十八課 害蟲と益蟲……………	百十九
第十四課 太田道灌……………	五十六	第二十九課 スバルタ武士……………	百二十五
第十五課 都會と田舎……………	六十	第三十課 母の愛……………	百三十一

高等小學讀本 卷一

第一課 艦上の威仁親王殿下

明治十二年の末、威仁親王殿下は實地御練習の爲、海軍少尉補の御資格にて、英國支那艦隊の旗艦アイヨンデュークに乗組ませ給ふ。是實に金枝玉葉の御身を以て外國軍艦に召して、親しく御修業遊ばさるゝことの嚆矢にして、名にし負ふ海軍國の艦隊のことなれば、規律の嚴肅なることもいふばかりなかりき。

或時アイヨンデュークは他艦と共に香港に碇泊せり。たまたま同港に寄泊せる我が官人某氏、久々にて殿下の

尊容を拜せばやと、急ぎ端舟に乗じ、雨を冒して同艦に至り來意を告ぐれば、艦長クリーブランド大佐は快く某氏を迎へて、殿下は唯今御勤務中なれば、しばし待たるべし。若し又艦内一覽の御望もあらば、案内致させんと言ふ。某氏其の好意を謝し、一將校に案内せられて艦内其處此處と巡覽し、遂に上甲板に出でたり。折しも風さへ加りて猛雨斜に飛ぶ中に、全身しとゝに濡れながら、ずぼん高くまくりて、白々と素足を現し、嚴かに雨中に直立せるものあり。雨衣の頭巾目深なれば、面貌は見えざれども、副直勤務中の少年士官とは手にしたる望遠鏡にても知られたり。案内の將校と某氏

に語りて、風雨にさらされつゝ、職務を執る彼の少年士官こそ殿下にましますなれ。といふ。某氏は打驚き、餘りの御痛はしさに、思はず走り寄りて、殿下、殿下と申し上げしに、殿下は端然直立せられたるまゝ、一言の御答もなし。某氏も始めて御勤務中の御身に對して言葉を掛け奉りし輕忽のふるまひを悟り、恐懼おく所を知らず、一禮して艦長室に歸り、交代の時の到るを待てり。其の間某氏は萬感胸にせまりて、落つる涙を止めあへざりき。

程もあらせず、殿下は司令長官クート中將と共に艦長室に入らせ給ふ。某氏の殿下に對する御挨拶終るや、中

將やがて某氏に向ひて、貴下は今雨中に立てる最も尊敬すべき貴紳を見給ひしならん。貴下の感想如何を知らず。唯願はくは、余を以て貴紳を待つ禮を知らざるものとなすことなかれ。余が殿下を他の將校と同視して、時に或は常人すら難しとする職務に服せしめ奉る所以は、殿下をして將來有爲の武將たらしめ奉らんが爲のみ。余は殿下の教導を委任せられたる英國の名譽の爲、あくまで其の成功を期し奉らざるべからず。余の最も感喜にたへざるは、殿下が學術に勝れ給ふのみならず、如何に困難なる職務を執らせ給ふ際にも、つゆいとはせ給ふ御氣色なきことにして、余は殿下の例を引

きて部下を訓誡するを常とせりと。

某氏は今更に英國海軍の規律の嚴肅なると、殿下の御職務に御勵精なるとに感じ入り、深く司令長官以下の好意を謝し、殿下に御暇乞申し上げ、名殘惜しげにアイヨンデークを辭せり。

第二課 足柄山

一 足柄山の よはの月、

空すみ渡る 笙の音に、

草木も耳を そばだてて、

谷の眞清水 ひびき合ふ。

二 新羅三郎 義光は

更に祕曲を 吹添へて、

取出したる 一卷を

時秋が手に 渡しつゝ、

三 汝が父より 傳はりし

祕曲は之に 藏めたり。

今の調を 耳にしめ、

都路として 還れ、とく。

四 さすが名残の 惜しまれて、

時秋尙も 御後に

從ふべし。と ためらへど、

義光頭を うちふりて、

五 我戰場に 向ふ身の

野末の露と 消えん時、

汝にあらでは 此の曲を

誰かは後に 傳ふべき。

六 我は武の爲、 家の爲、

汝は世の爲、 道の爲、

まさきくあれ。と 西東、

露けき袖を 分ちけり。

第三課 眞の知己

一時の朋友を得ることは易く、眞の知己を得ることは
難い。平素歡樂を共にする間は、肩を打ち、手を執つて、互

に談笑するが、一旦利害相反すれば、忽ち仇敵となるやうな者は眞の知己ではない。眞の知己は死生の境に臨んでも、相信じて疑はないものでなければならぬ。

昔伊太利のシシリ島にピテウスといふ男があつた。或罪に依つて、國王の前に引出されて、死刑を言渡された。ピテウスは今生の思出に老父母の顔が見たくてたまらない。死刑執行の日には必ず歸つて来るから、此の世の名残に今一度父母に會はせてもらひたいと歎願に及んだ。王は一言の下にはねつけた。

ピテウスの無二の親友にダモンといふ若者があつた。王に向つて、

私はピテウスの親友で御座います。彼は決して二言致すやうな者では御座いません。どうか特別の御仁愛を以て、彼の願をお聞入れ下さるやう願ひます。其の代りに私を獄中に入れて、萬一期日に至つて彼が歸つて参りませんやうなことが御座いましたならば、私をお仕置下さいませ。

と言つた。王は此の友情に感じて、ピテウスの願意を聞届けて、ダモンを獄屋に入れた。光陰は矢の如く、約束の期限はせまつたが、ピテウスは歸らない。王は獄卒に命じて、厳しく獄門を固めて、ダモンの動靜に一層の注意を拂はせた。しかもダモンは平然として、少しも不安の色を

示さない。彼は言つた。

若し期日に至つてピテュスが歸らないとしても、決して彼の本心から出たのではない。何か不慮の故障が起つたのである。

いよく約束の期日になつた。約束の時間がせまつた。けれどもピテュスは歸らない。影も形も見えない。ダモンも今は是までと死ぬ覺悟を極めた。彼の親友に對する信用は更に變らない。彼は又言つた。

今こゝで殺されるのは最も信愛する友人の爲である。少しもうらむことはない。

獄卒はダモンを刑場に引出した。彼の一命は寸刻の間

にせまつた。此の時早く彼の時遅く、ピテュスは息も絶え絶えになつて、かけこんで來た。彼は途中風波の爲に妨げられたのであつた。若し期日に遅れるやうなことがあつては、一つには無二の親友を殺し、二つには二言を吐いた惡名を後の世に傳へると思へば、立つても居ても居られない氣がしたが、如何とも仕方がなかつた。船が陸に着くや否や、ひた走りに走つて刑場にかかけ付けて見れば、ダモンはまだ生きて居たので、餘りのうれしさに目前の死も何も忘れて、手の舞ひ足のふむ所を知らなかつた。

王は二人の信義と愛情に感激して、ピテュスの罪を許し

た。

若し我にもこんな親友を持つことが出来るなら、王者の富貴も榮華もいらない。
とは王の心の奥の奥から出た歎聲であつた。

第四課 故郷

人一人たび故郷を離るれば、故郷の風物は常に其の心中を往來す。嬉しき時にも故郷を思ひ、悲しき時にも亦故郷を思ふ。久しく異境に在りて故郷に歸れば、山川草木悉く歡んで我を迎ふるの感あり。殊に業成り名遂げて、之を故郷の父老に告ぐるは、人生の至樂なり。故に古來志を立つるもの、錦を衣て故郷に歸るを希はざるもの

なし。

故郷の慕はしきは、必ずしも山水の美なるが爲に非ず。又風土の住みよきが爲にも非ず。不毛嚴寒の地に住める北極の土人も、百花咲滿つ南方温暖の地に來りて、尙其の故郷を忘るゝこと能はずといふにあらずや。故郷の慕はしきは、祖先墳墓の地にして、我が幼時嬉戲せし處なればなり。祖先幾代此處に生活し、永く此處に眠れるを思へば、心無き山河も自ら情あり。我が嬉戲せし幼時の樂しき記憶をおもひ起せば、木石亦知友の感なくんばあらず。況や父母妻子、兄弟姉妹親族、故舊の我を待つあるに於てをや。

故郷は我が出生の地を中心とすれども、其の範圍一定ならず。一郡より見れば、村は即ち故郷なり。一縣より見れば、郡は即ち故郷なり。全國より見れば、縣は即ち故郷なり。世界より見れば、國は即ち故郷なり。故に故郷を愛する心は即ち國家を愛する心なり。

故郷を愛する心は故郷を遠ざかるに隨ひて、益強きを加ふるものにして、我が帝國の領土を出でて遠く異邦に在る時、其の最も強烈なるを覺ゆべし。彼の三笠山の歌を誦するもの、誰か萬里異域の客として故郷の空を慕ひし仲麻呂の感慨を察せざらんや。

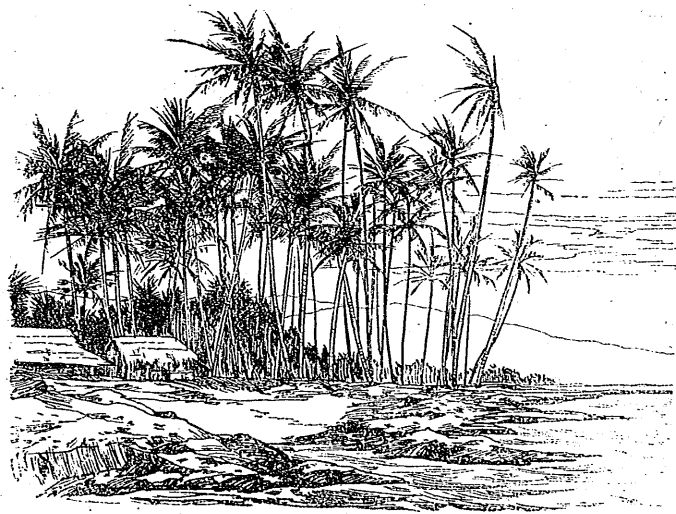
然れども今は昔と異なりて、通信・交通の機關發達し、數

十日にして世界を一周すべく、數時間にして極遠の地にも音信を通ずべし。又世界各國は殆ど我が帝國の友邦ならざるはなく、到る處確實なる保護を受くるを以て、旅行するも、事業を經營するも、極めて安全なり。されば各國民互に海外の發展を競ふ今日、徒らに故郷に戀戀として國內に小利を爭ふは、故郷を愛する所以に非ず。又國家を愛する所以に非ず。強固なる目的と確實なる手段とを有するものは、盛に海外に雄飛して、帝國の發展に貢獻すべし。骨を埋むる豈た墳墓の地のみならんや。人間到る處青山あり。

第五課 布哇通信

拜啓、出發の際は遠路わざく御見送り下され、有り難く御禮申上候。御蔭を以て十日間の航海、甚だしき風波にもあはず、豫定の通り去る二十日、無事當地ホノルルに到着、一兩日間諸處見物、かねて御話申上置候商會に入り、愈昨日より執務致居候間、御安心下され度候。御承知の通り布哇は十餘の群島より成り、總面積は我が四國と伯仲致居候。ホノルルはオアフと申す島に在り、布哇第一の都會にて、亞米利加合衆國に合併せられ候までは、一國の首府たりし處に御座候。學校、博物館、公園等の

設備も行届き、歐米の都會にも劣らざる由に御座候。布哇の人口は約二十萬、其の内二割は土人にて、他は米國人と外國人とに御座候。我が日本人は七萬



を超え、外國人中大多數を占め居候。此の邦人の大部分は勞働者にて、主に製糖會社に雇はれ、甘蔗の栽培及び製糖等の勞役に從事致居候。此の如く多數の同胞居住致居候へば、それを相手に各種の商業を營むものも少からず、當市の如きは邦人の商店軒を並べ、總領事館、横濱正金銀行支店を始とし、日本商會も澤山これあり候。又學校あり、本邦人の醫師も少からず、衣服、食料品等は申すまでもなく、本國の品物を求むるに、何一つ不自由とはこれなく候故、三千四百哩を隔てたる遠地へ参りた

る感じは少しも致さず、全く本國に在るが如き心地致居候。

當地は熱帶地方の事故、暑熱焼くが如き處と覺悟致居候處、四面皆海に圍まれ、海風常に吹來り、度々夕立ありて、存外涼しく、氣候の變化も少く、誠に凌ぎ易く候。先は安着の御報かたがた、當地の模様大略申上候。敬白。

月 日

青木喜之助

山根政太郎殿

第六課 公園

公園ニハ樹木ヲ植エ、草花ヲ咲カセ、山ヲ築キ、池ヲ掘リ、

魚鳥ヲ養ヒ、又廣キ運動場ヲ設ケ、娛樂ノ具ヲ備フル等、務メテ空氣ヲ清潔ニシ、耳目ヲ樂シマセ、健康ヲ増進セシメンコトヲ期ス。

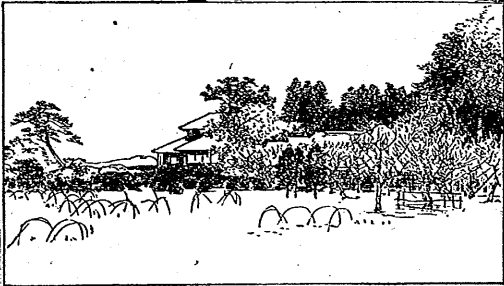
世界何レノ國ニテモ、名高キ公園ニハ、諸侯ノ庭園ヲ公開シタルモノ多シ。例ヘバ我が國ニテモ、水戸ノ偕樂園^{カイラクエン}ハ徳川侯ノ庭園、岡山ノ後樂園ハ池田侯ノ庭園タリシガ如シ。又我が國ニハ、神社佛閣ノ境内ヲ直チニ公園トセシモノ少カラズ。上野公園ハ寛永寺ノ境内ニシテ、奈良公園ハ春日神社興福寺東大寺ノ境内ナリシ等ナリ。近年都會ノ發達スルニ隨ヒ、公園ノ必要益加リ、市内又ハ近郊ニ空地ヲ求メテ之ヲ營ムニ至レリ。ソモ、都

會ノ地ハ戸口稠密ナレバ、空氣自ラ不潔ナルノミナラズ、交通頻繁ニシテ、行動敏活ナレバ、人ノ精神ヲ勞スルコト甚ダシ。故ニ都會ニ住ムモノハ、時々草木生ヒ茂レル廣地ニ出デテ、新鮮ナル空氣ヲ呼吸シ、其ノ身體ヲ養ヒ、其ノ精神ヲ休ムル必要アリ。

歐米諸國ニテハ、都會ノ家屋ハ五階六階ヲ普通トシ、數家族一屋ニ住スルモノ多ク、且廣キ庭園ヲ備フルモノ稀ナレバ、我が國ノ都會ニ比スレバ、其ノ面積ノ割合ニ人口ハルカニ多シ。隨ツテ早クヨリ公園ノ設アリ、其ノ數亦極メテ多シ。我が國ノ家屋ハ平家若シクハ二階建ニシテ、通例一家族一屋ニ住シ、且廣キ庭園ヲ有スルモ



金澤兼六園



水戸偕樂園

ノ多キガ故ニ、近年ニ至ルマデ、甚ダシク公園ノ必要ヲ感ズルコトナカリキ。我が國ノ都會ニ公園ヲ設クルニ至リシハ維新以後ノ事ナリ。

歐米諸國ニテ、規模ノ廣大ヲ以テ名高キハ倫敦ノハイドパーク、巴里ノボアドブーロ

ニ、伯林ノチーアガル

テン、紐育ノ中央公園

等ナルベシ。我が國ニ

テ風致ノ美ヲ以テ世

ニ聞エタルハ、水戸ノ

偕樂園、金澤ノ兼六園、

岡山ノ後樂園ニシテ、

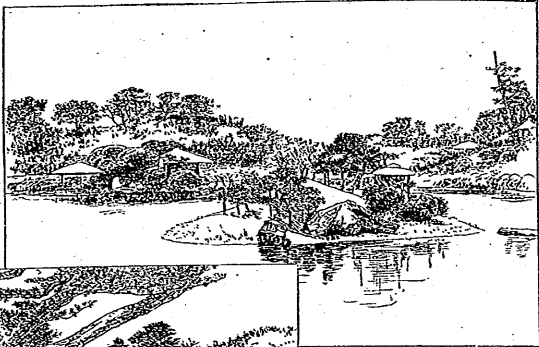
之ヲ日本ノ三公園ト

稱ス。然レドモ高松ノ

栗林公園ハ木石ノ雅

趣却ツテ此ノ三公園

岡山後樂園



高松栗林公園



ニ優レリ。

第七課 賴山陽

史家としても詩人としても有名なる賴山陽は、幼時より勤勉刻苦せる人なりき。八九歳の頃軍記を讀みて、大いに之を喜び、爲に寢食を廢するに至れり。十三歳の時一詩を賦して其の志を述べ、如何にしてか千載青史に列する人たるを得んといへり。長ずるに及びて益々文章を勵み、史學を修め、子弟を教授するかたは、常に著述を事とせり。毎朝必ず早く起き、自ら寢具を收め、座敷を掃除し、かつて之を人に委せず。終日讀書執筆して、夜は五更に至らざれば寢に就かず。有名なる日本外史は早

く二十五歳の時に成れり。又彼の日本政記は晩年の作にして、湯藥に親しみたる後も一日も筆を捨てず、眼鏡を着け、其の稿本を手にして逝けり。時に年五十三。山陽かつていへらく、我を才子なりといふものは、我を知らざるものなり。よく刻苦すといふものは、眞に我を知るものなり。と。

凡そ如何に才氣ある人にて、勤勉刻苦の勞を積まざれば、一世の事業を成し難し。況や才氣の乏しきものに於てをや。山陽の才氣既に非凡にして、勤勉亦衆に超えたり。是其の千古の名を成して、古人と共に青史に列したる所以なり。

山陽の景慕すべきは、其の學問事業の上のみにあらずして、亦其の徳行の人たるにあり。山陽かつて門弟の爲に莊子を講ぜしが、たま／＼父危篤の報に接し、講を半にして急卒郷里に歸れり。歸れば父既に逝けり。山陽悲歎やむ能はず、是より再び莊子を講ぜざりきといふ。父の死後は母に事へて奉養特に厚く、しば／＼母を奉じ嵐山吉野等に遊びて、觀花の宴を催し、其の心を歡ばしむるを以て無上の樂みとせり。

山陽亦忠君の念に厚く、かつて病中にありて、談楠公の事に及び、慷慨激越殆ど病を忘れたるものの如くなりき。山陽が一生の著述詩文は皆其の忠君の精神に成れ

るものなり。其の著述の世道に益あり、人心を感奮せしめしこと幾許なるを知らず。

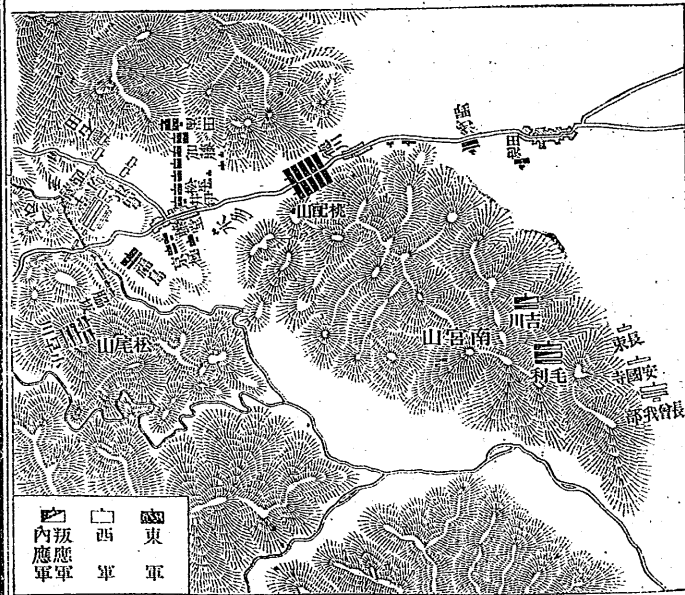
智と徳とは兩つながら備へざるべからず。才學ありとも、心下劣にして、行賤しければ、人の尊敬を受くること能はず。いかでか世を指導するを得んや。學を修むるものは亦必ず其の徳を磨くべし。

第八課 關原合戰

東海道鐵道、名古屋驛より西北に進みて約五十哩、美濃の關原に至る。此の地は往時の中山道の一驛にして、今より凡そ三百年以前、天下分け目の大戰爭ありし地なり。

時は慶長五年九月十五日、昨夜大雨を冒して大垣を發したる西軍は、石田三成の隊を始として、島津義弘、小西行長、宇喜多秀家の諸隊、前後相ついて關原に達し、各陣地を其の西部に布けり。けだし東軍は直ちに大阪に向はんと聲言せるを以て、こゝに之を要撃せんとするなり。大谷吉繼は關、藤川を前にして陣し、驛の西南なる松尾山には小早川秀秋あり。東南なる南宮山には毛利秀元、其の麓には長曾我部盛親、安國寺惠瓊、長束正家等あり。此等の諸隊は昨日の位置を守りて、西軍の陣地全くなり。兵數總計七萬九千、號して十萬といふ。赤阪に在りし東軍は家康の下せる命令を奉じ、未明よ

り諸隊逐次に行進を起して、中山道を西上す。先頭二隊と爲り、左は福島正則、右は黒田長政にして、家康の子松平忠吉之に次ぎ、井伊直政之を輔翼し、加藤嘉明、藤堂高虎以下の諸隊又之に次ぐ。先鋒隊の關原に着



せしは夜の引明にして、夜來の雨未だ止まず、曉霧山野をこむ。諸隊しばらく行進を止めて、其の霽るゝを待つ。兵數總計七萬餘。

午前七時頃、忠吉直政は先づ宇喜多の隊に向つて戦端を開く。先鋒正則之を見るや、銃卒八百人をして宇喜多隊を射撃せしむ。藤堂京極の二隊は銃聲を聞き、進んで大谷の隊を攻撃し、黒田長政・加藤嘉明等は石田小西の隊に向ふ。是より先家康馬を進めて桃配山に在り。戦況を知らんと欲すれども、霧未だ霽れずして、諸隊の進退を見ず、唯銃聲と喊聲とを聞くのみ。

戦正にたけなはなり。福島・宇喜多の一勝一敗せる中、黒

田長政は進んで三成の本隊を撃破し、寺澤・戸川の諸隊は亦小西の隊を破り、西軍愈々危し。島津の一隊獨り動かず。大谷の前隊は關・藤川を越えて前進し、藤堂・京極等の隊と相戦ふ。三成機の熟するを見て、のろしを上げて、松尾・南宮の諸隊をして下り撃たしめんとし、又急使を走らせて之を促す。小早川・秀秋は早くより家康に内應する約あり。此の時霧既に霽る。秀秋、松尾山の陣地より東西兩軍の旗色を觀望して動かず。

日既に午に近し。西軍防戦最も力め、勝敗の決未だ知るべからず。家康・秀秋の進退如何を疑ひ、先づ其の陣地に發砲せしむ。秀秋こゝに至りて始めて進撃の令を傳へ、

西北へ向つて下り、銃卒をして直ちに大谷の隊を射撃せしむ。家康之を見て、盛に喊聲を發せしめ、東軍の士氣大いに振ひ、遂に總進撃を開始す。尋で西軍脇坂安治も亦叛きて東軍に應じ、大谷の隊三面攻撃を受けて敗れ、吉繼は自刃す。既にして宇喜多小西の隊敗れ、石田も亦敗走す。留りて戦ふものは島津の一隊あるのみ。義弘、西軍敗績勝算なきを見て、家康の本陣を突きて一死を潔くせんとす。其の子豊久之を諫む。依つて敵中を突過して走る。福島小早川井伊の諸隊、追撃甚だ急なり。義弘の部下多くは戦死し、餘す所僅かに八十餘人。東軍の將、忠吉直政亦傷つく。義弘遂に逃れ去る。時に午後二時過なりき。

南宮山の麓に在りし西軍の長東安國寺等は、銃聲を聞き、山上に在る毛利と共に進み戦はんとせしに、毛利の前隊吉川廣家等、東軍と密約あるを以て應ぜず、且戦況西軍に利あらずと聞き、此の大合戦に参加せずして走れり。此の日西軍の死傷八千餘人、東軍は其の記載なし。秀吉薨後の權力爭奪は、此の一日の劇戦によりて一段落を成し、徳川氏統一の業全く成れり。

第九課 武器の變遷

竹木を以て造りたる弓矢は、太古人の飛道具なり。鏃やじりには石を用ひたるあり。凡そ金屬を使用するを知らざり

し時代には、武器は多く石或は木にて製し、之を以て鳥獸を獵り、他の民族と戦ひしなり。今尙諸處に發見せらるゝ矢の根石の類は、即ち此の時代の遺物なり。

銅鐵を用ふるに及びて、始めて刀劍あり。鏃にも金屬を用ひ、矛槍等各種の兵器も頗る銳利となれり。之を防ぐの具としては、盾あり、甲冑あり。甲冑を以て身を固め、手に盾を持ち、先づ遠矢を射て、然る後刀槍の接戦に移るは、東西古代の戰、皆然らざるはなし。

飛道具の威力に於ては、弓矢はもとより銃砲に及ぶべくもあらず。故に火藥の發明、銃砲の製作ありて後は、鐵製の盾も甲冑も彈丸を防ぐに足らず。堅固なる城壁も

砲彈の前には防禦の効力を失へ

り。こゝに於て戰士はむしろ

輕装して進退動作に便するに如かず。戦法

は爲に一變して、個人の接戦は最後の決勝手

段にして、交戦の大部は、銃砲の遠戦となれり。

是即ち近代の戦争なり。故に歐羅巴の歴史家

には、火藥の發明を以て、中古と近代との時代

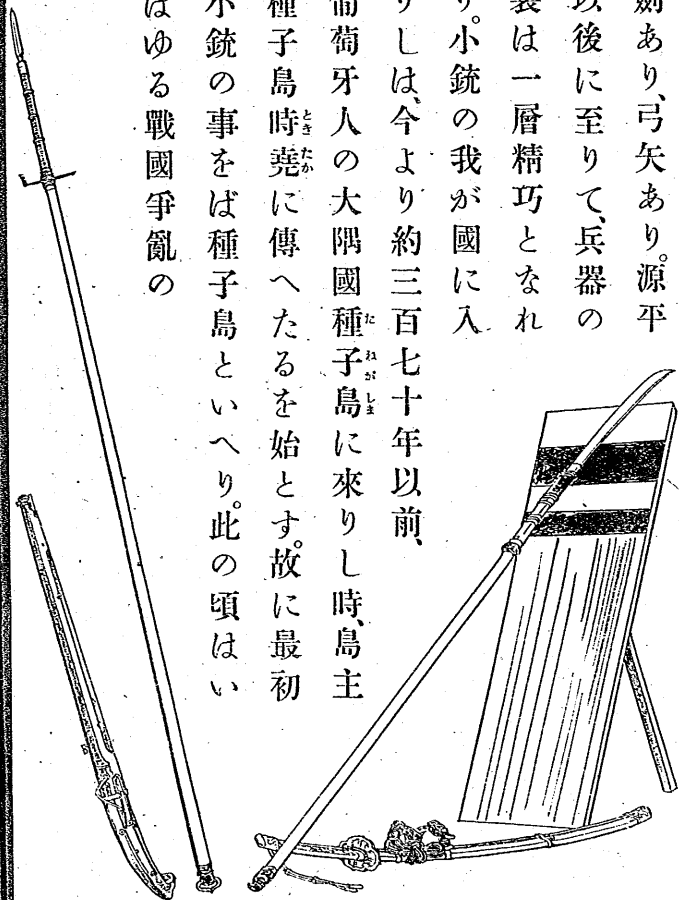
を分つものあり。

我が國古代の武

器には、矛あり、刀

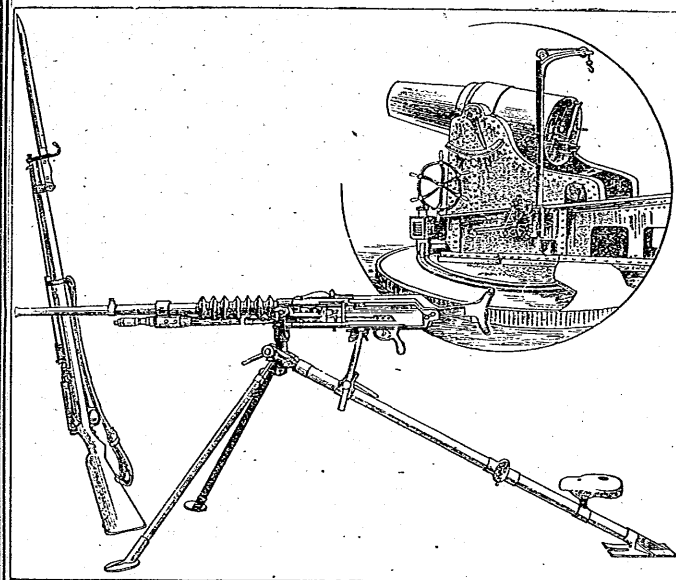


劍あり、弓矢あり。源平以後に至りて、兵器の製は一層精巧となれり。小銃の我が國に入りしは、今より約三百七十年前、葡萄牙人の大隅國種子島^{なごしま}に來りし時、島主種子島時堯^{ときたか}に傳へたるを始とす。故に最初小銃の事をば種子島といへり。此の頃はいはゆる戰國爭亂の



時代なりしかば、諸大名は争うて其の製法を傳習し、傳來後三十餘年、彼の長篠の戰爭には、織田・徳川の軍勢既に三千の小銃を用ひたりといふ。其の後大砲も亦始めて豊後國に傳はり、國主大友宗麟は國崩^{くにふし}と名づけて珍重したりといふ。

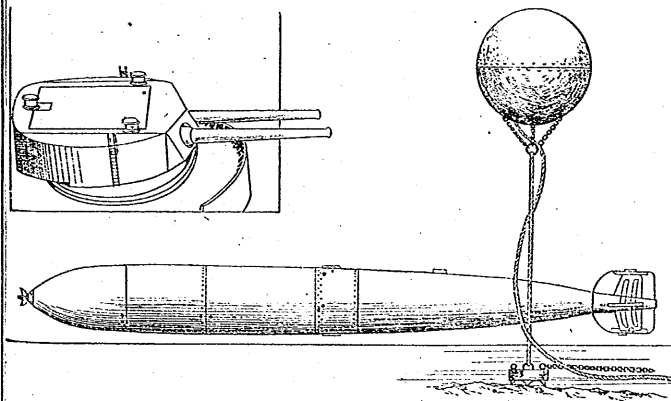
徳川太平三百年、砲術には格別の進歩も無かりしが、其の末年諸外國の船艦頻りに我が近海に出沒するに及び、新に西洋の砲術を學び、造砲の方法を研究せし愛國者も少からず。明治維新後其の技術の特に長足の進歩をなせるは、日清・日露の二大戰役によりて證明せられ、世界各國のひとしく驚歎する所なり。



今の世の陸戦はおほむね銃砲の戦争なり。歩兵は小銃を以て交戦し、砲兵は砲彈を以て敵を撃破す。故に銃砲は各國互に其の精銳を競へり。小銃は輕便にして、彈丸能く一里以上に達す。然れども勝敗最後の決

は多く白兵の接戦にあるを以て、小銃には銃劍を附して刀槍の用を兼ね。又威力の最も盛なるは機關銃にして、一分間に能く六百發を發射し得べし。大砲には山砲あり、野戰砲あり、要塞砲あり、攻城砲ありて、結構いづれも精巧を極め、一分間に數十發を發射すべきものあり。古の戦争は初より主として人と人との接戦なれども、今の戦争は此の如き精銳なる武器の力によりて、勝敗の勢を定む。同じく十萬の兵を動かすといふも、其の殺傷力の大小は日を同じくして語るべからず。海軍の戦争も亦大砲を主要なる武器とす。現今軍艦に備ふる十二吋砲は、其の長さ凡そ四十七呎、重さ十三萬

ボンド
 听に及び、之に用ふる彈丸は、重さ八百五十听にして、之を發射すれば、能く五哩の遠きに達す。かくの如き巨砲も機關の裝置によりて、一二の兵員自在に之を廻轉發射することを得。一水兵の手中にある戰鬪力の強大なるを知るべきなり。



り。魚形水雷は自動水雷の一にして、艦艇の發射機より發射するものなり。又船體をあらはさずして敵艦に近づく潜水艇の製作をさへ見るに至れり。銃砲發射の術に於ても、武器製造の法に於ても、各國互に學術を應用して、盛に新奇を競へり。加之無線電信は既に軍用に供せられ、飛行器も同じ目的の下に研究中なれば、他日成功の曉には、地上の戦争は轉じて空中の戦争とならんも亦知るべからず。今の世の平和はいはゆる武裝的平和にして、學問・智力の戦争ともいふべし。

第十課 日本海

日本海は亞細亞大陸の東方に在り。北方の一部露領沿

海州に接するのみにて、他は盡く我が邦土に包まれ、朝鮮・津輕・宗谷・間宮の四海峽を以て他の海洋に通ず。島嶼甚だ少く、隱岐・佐渡の二を以て其の重なるものとす。他に禮文・利尻・奥尻・沖島・鬱陵島・竹島等の小島なきにあらざれども、大小島嶼の點在せる東支那海及び黃海方面には比すべくもあらず。

海岸は斷巖絶壁の處多く、冬季より春季にかけては風浪險惡にして、陸岸に近寄り難きこと少からず。又海潮干満の差甚だ少くして、春の半に知友誘ひ合ひて、潮干狩を爲すが如きは得て望むべからず。されど海水すみ渡りて、海岸の清らかなるは遠く南海にまさる。

海岸線は一般に出入少く、随つて良港灣に乏し。唯我が國に唐津・博多・若松・境・舞鶴・敦賀・七尾・新潟・小樽・元山・城津等あり、露領に浦潮斯德ありて、浦潮斯德と我が敦賀・長崎等の間には、汽船の定期航海あり。敦賀・浦潮斯德間の航程は僅かに四十時間に過ぎず。又現時朝鮮に京元鐵道敷設の計畫あり。完成の曉には敦賀・元山間にも汽船の往復頻繁なるに至るべし。

日本海は我が國に取りて、軍事上忽にすべからざる處なり。よりて對馬・津輕の二海峽には警備隊要港等を置き、舞鶴には軍港の設ありて之を守る。日本海は實に其の名の如く、我が國の海といはんも不可なし。

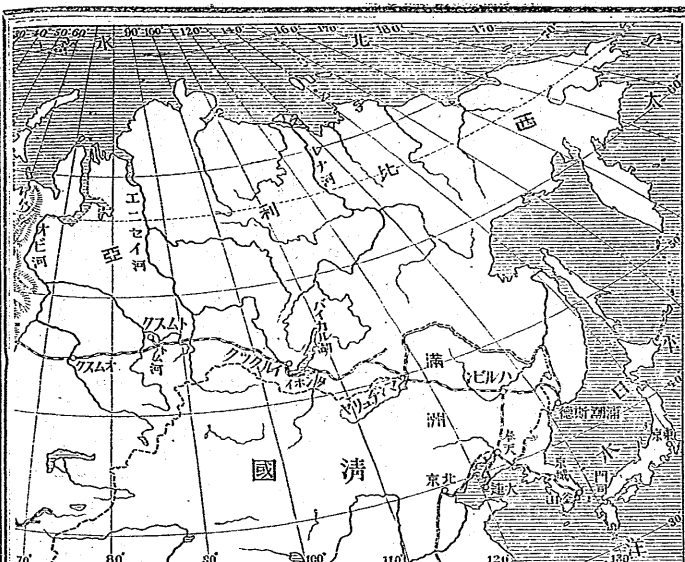
日本海は頗る漁利に富めり。本州及び北海道の近海には鰯^{すゐめ}、鯧^{さけ}、昆布等を産すること殊に多く、樺太及び露領の海は鮭、鱒等おびたしく、朝鮮の海は鯨と明太魚とに名あり。夏秋の交、釜山より北へ向ひて城津に航する者は、鯨を見ること十二三頭に達すといふ。

日本海は古より多く歴史上に重要な事蹟を有せず、随つて世界の注意をひくことも少かりしが、日露兩國の海軍、全力を盡して此に奮戦せしより、にはかに其の名を知らるゝに至れり。顧ふに日本海は今後我が國運の發展と共に、國防上、通商上、産業上益重要な舞臺となるに至らん。

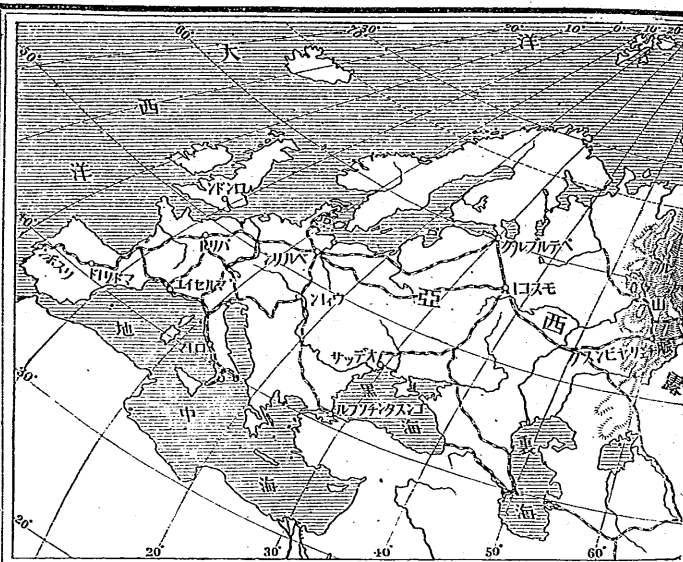
第十一課 西比利亞鐵道

歐羅巴に向ひて大連を發せるは、六月二十日の午後一時なり。翌朝午前六時長春に着し、是より露國の東清鐵道に轉乘し、哈爾濱に着きて、モスコー行の客車に移る。客車は總べてボギー貫通式にして、車幅また大なり。一等には各室に、二等には車輛の兩端に洗面所あり。又別に食堂車、貨車あり。食堂車は圖書室を兼ね、貨車には浴場の設ありて、隨時旅客の需に應ず。

哈爾濱よりマンヂリヤに至る間は清國の版圖にして、軌道の左右、清國人が樹下石上に煙を吹きて、過行く汽車を目送し、空飛ぶ雲を眺むるを見る。美しきは平野滿



目の草花なり。驛毎に谷百合忘るな草、櫻草等の花束を賣る。
マンチュリヤ以西は、總べて露領に屬す。河流に沿うて牧場多く、テントを張りて生活する土民を見る。間、赤く青く塗立てたる木造の家屋あり、尖塔ありて、金色の十字架の高くかゞやけるは寺



院なるべし。
二十四日の早朝タンホイ驛に着して、バイカル湖の青波を望むを得たり。湖邊の連山は處まだらに雪を残し、湖水また雪をたゞよはす。汽車は湖に沿うて迂回す。かつては汽船によりて横斷したりしが、日露戰役中、露國が多額の資を投じ

て、山を掘り岩をうがち、此の迂回線を通じたるなりといふ。

バイカルを後にして間もなく、西比利亞第一の都會イルクツクに着く。マンチュリヤより此の驛までをザバイカル鐵道といふ。西比利亞鐵道とは是より西ウラル山下までの稱なり。此の附近亦牧場多し。之を過ぐれば、汽車は全く花の夏野に入れり。目なれぬ草の中に、我等が庭園に栽培する芍藥しゃくやくの多く野生せるを見る。點々たる農家の側に竿を立てて、其の頂に郵便箱の如きものを載せたるあり。同乗の人に問へば、小鳥に巢を與ふるものなりとは、やさしき心ならずや。

西するに隨ひて、驛毎に移住民の群を見ること多し。西比利亞は我が國に二十倍の面積ありて、住民は我が凡そ十分の一に過ぎず。所謂十里人煙を見ずの境少からざれば、露國政府は乗車賃を輕減し、耕地を與へ、農具を貸與して、盛に移住を獎勵せり。

エニセイ・オビ・二大河の上流地方は、一望無限の草野なり。土地また肥沃にして、麥類の栽培に適するを以て、西比利亞の穀倉と稱せらる。然れども住民未だ多からず、數里にして一部落を見、數十里にして一市街を見るのみ。

トム河畔の都會トムスクの南を過ぎて、二十八日の

午後オムスクに着く。此のあたりも亦一面の草野にして、丈長き尾花の風に波立つを見る。やがて西比利亞鐵道の終點チリヤビンスクに着きて、汽車はウラル山中に入れり。時に奇峯の遠くそびゆるを見ることあれども、殆ど廣野を行くの感あり、身の大山脈中に在るを覺えず。何時しか汽車は此の大山脈を越えて歐羅巴の地に入れり。今日は七月二日にして露曆の六月十九日なり。是より一晝夜餘りにしてモスコーに着かんとす。

第十二課 ペートル大帝

ペートル大帝ハ露國中興ノ英主ニシテ、西曆一千六百八十二年、十一歳ヲ以テ帝位ニ卽ケリ。露國ハ其ノ頃既に廣大ナル領土ヲ有セシカドモ、海港ハ北氷洋ニ通ズル白海ノ一小港アルカンジアルノミ。帝ハモスコーニ近キ小流ヲ上下スル川舟ノ外ニハ、船トイフモノヲ見タルコトナカリキ。

帝ハカツテ祖先ノ遺物ヲ藏セル倉庫ニ入リテ、英國製ノ帆船アルヲ見、人ニ問ヒテ、始メテ是モ亦船ナルヲ知レリ。又帆ノ用ヒ方ニ依リテ、思フマ、ニ西スベク、東スベシト聞キ、直チニ修繕セシメテ之ヲ試ミシニ、少シモ其ノ言ニ違ハズ。ヨリテ更ニ大ナルモノヲ造ラシメテ、自ラ帆綱ヲ操リシニ、其ノ進行意ノ如クナリシカバ、是ヨリ船ト水トニ深キ興味ヲ有スルニ至レリ。

和蘭英吉利等ノ商工業ノ發達シ、海軍ノ強盛ナルヲ傳
ヘ聞キテ、羨望ノ念、禁ズルコト能ハズ。如何ニモシテ露
國ヲ海軍國トナサント志シ、常ニ人ニ語リテ、我ガ欲ス
ル所ハ陸ニアラズ、水ナリ。トイヘリ。カクテ先ヅ土耳其
ト戰ヒテ、黑海ニ臨メルアゾフノ地ヲ得タリ。是ニ於テ
伊太利等ヨリ造船技師ヲ雇ヒ、僅カニ二箇年ノ間ニ一
艦隊ヲ造リテ、アゾフ海ニ通ズル河流ニ浮ベタリ。是帝
ガ二十五歳ノ時ノ事ニシテ、實ニ露國海軍ノ始ナリ。
帝ハ盛ニ造船技師及ビ海軍士官ヲ養成セント欲シ、貴
族ノ子弟ヲ選ビテ、伊太利和蘭英吉利ニ留學セシメ、航
海ノ技ニ熟スルニアラズンバ、再ビ母國ノ地ヲ踏ムベ

カラズト嚴命セリ。帝ハ尙之ヲ以テ満足セズ、親ラ進ン
デ造船ノ技術ヲ學バント欲シ、母后及ビ近臣ノ諫ムル
ヲ聽カズ、政ヲ最モ信賴スベキ貴族ニ委ネ、微行シテ先
ヅ和蘭ニ到リ、一造船場ノ職工トナリテ勞役ニ從ヘリ。
獨リ造船ノ事ノミナラズ、暇アレバ工場、商店、博物館、病
院、裁判所等ヲ參觀シ、又天文學、數學等ノ講義ヲ聽キ、外
科醫ノ術ヲモ學ベリトイフ。イヤシクモ採ツテ以テ露
國ヲ開發スベキモノハ、細大モラサザラントスル熱心
ヨリ、アラユル事物ヲ觀察セシナルベシ。
カ、ル間ニモ、王者ノ裔ナレバ、何トナク匹夫下郎ニ似
ヌ所アリ、誰言フトモナク、常人ニアラズト言ヒハヤサ

レタリ。轉ジテ英國ニ渡ル。英王ウイリヤム三世厚ク之ヲ
遇シ、造船場其ノ他特殊ノ工場等ニ案内セシメ、特ニ海
軍ノ演習ヲナサシメテ之ヲ示ス。帝ハ始メテ大艦隊ヲ
見テ、其ノ雄大ナルニ驚キ、年來ノ希望ハ一時ニ燃エ上
リ、我モ亦イツカ、カ、ル強大ナル海軍ヲ備ヘテ、隣邦ニ
ホコル時ナクシテ止マンヤト、益、其ノ決心ヲ固メタリ。
外國遊歴二年ノ後、國ニ歸リ、制度ヲ革新シ、風俗ヲ改良
シ、商工業ヲ獎勵シ、學校ヲ設立スル等、全力ヲ盡シテ文
化ノ開發、國勢ノ發展ニ任ジ、一日モ怠ルコトナカリキ。
又一千七百三年ニハ今ノペテルブルグ府ヲ設ケテ、都
ヲコ、ニ遷シ、尋デ瑞典ト戰ヒテ大勝利ヲ得、バルチック

海東岸ノ地ヲ割カシメタリ。今日ノ露國ノ版圖、歐羅巴
亞細亞ノ二大陸ニマタガリ、地球上全陸地ノ六分ノ一
ヲ占メ、世界ノ一大強國トナレル基ハ、二百餘年ノ昔此
ノ英明果敢ナル君主ニヨリテ開カレタルナリ。

第十三課 風

一 風よ風、そもいつちよりいつち吹く。

草の上、やぶの中、

岡を過ぎ、谷を過ぎ、

鹿も通はぬ奥山越えて。

二 風よ風、そもいつちよりいつち吹く。

池の上、森の中、

村を過ぎ、里を過ぎ、

鳥も通はぬ荒海越えて。

三 夜は明けぬ。とく起き出でて園見れば、

草は伏し、木は倒れ、

花は散り、實は落ちぬ。

風や荒れけん、夜すがら此處に。

四 日は暮れぬ。燈火消して寝に行けば、

泣くがごと、むせぶがごと、

戸をたゝき、窓を打つ。

風や羨む、我が此のふしど。

第十四課 太田道灌

古の眞の武士は文武二道に心がけたり。されば戰國爭亂の世にも、文雅風流のたしなみありし人少からず。太田道灌の如きも其の一人なり。

道灌は初め左衛門大夫持資といひて、關東管領上杉定正の家臣なり。幼時より氣力盛にして人に屈せず、武道をのみ好みて、末恐ろしき少年よとうはさせられしが、壯年の頃鷹狩に出で、雨に遇ひて、とある民家に入り、雨具を借らんとせり。主の少女一言の答もなく、山吹の花一枝を差出す。持資心得ず、其のまゝに歸りしが、後或人の語りて、それは

七重八重花は咲けども、山吹の

みの一つだに無きぞかなしき。

といふ古歌の心なるべしといふを聞きて、始めて身の無學を恥ぢ、それより和歌・文學に心を寄せたりとぞ。其の後武藏國江戸の地に城を築き、城内に文庫を營み、史籍歌集醫書兵書等數千卷を藏め、暇あれば書を讀み、歌を詠じたりといふ。かつて將軍義政に見えんとて上京せし時、後土御門天皇勅して武藏野の様を問はせ給ふ。道灌歌を以て對へ奉る。

露おかぬ方もありけり、夕立の

空よりひろき武藏野の原。

又隅田川の都鳥はと問はせ給ふに、

年ふれどまだ知らざりし都鳥、

隅田川原に宿はあれども。

さらば汝が館の風景はとありしに、

我がいほは松原つゞき海近く

富士の高根を軒端にぞ見る。

と答へ申せしかば、叡感淺からず、御製を下し給ふ。

武藏野はかや原の野と聞きしかど、

かゝる言葉の花もあるかな。

或時の戰に、定正に従ひて、夜海岸を通りしに、定正潮の満干を知らず。道灌いふ、潮干たり、容易く進むべしと。定正其の故を問へば、道灌

遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に潮の満干をぞ知る。

といふ古歌ありと答へたり。

道灌の築きし江戸城は、後徳川氏之を修築して、歴代將軍の居城とし、當時の松原つゞきの寒村は、いつか繁華なる江戸の都會となれり。星霜四百年、明治の大御世の宮城をこゝに定め給へるは、道灌の名譽此の上なしとやいはん。

第十五課 都會と田舎

都會と田舎と、何れか住みよかるべき。此の間に對しての答は恐らく人によりて異なるべし。平生田舎にのみ

住める人、たゞく大都會に出づる時は、繁華と便利とに驚きて、或は何時までもこゝに居つきたしと思ふべく、都會にのみ住める人は其の反對に、或は田舎ののどけさを羨むべし。人はともすれば、よその境遇を羨むものなればなり。

げにや都會は繁華なり。街路は四通八達し、大家・高屋軒を連ね、電線は蜘蛛の巢の如く、電燈の光は晝をあざむき、人馬の往來絶ゆる時なし。

げにや都會は便利なり。電信あり、電話あり、汽車あり、電車あり。通信・交通の便備らざるなし。官廳あり、會社あり、銀行あり、學校あり、病院あり、劇場あり、公園あり、新聞社

あり、百般の商店悉くあり。諸の實用、諸の娛樂、望んで得られざるはなし。要するに都會ははでやかなり、花やかなり。都會の生活を人の羨むも理なり。されど又長く住めば、都會の生活には苦勞多く、不愉快多し。物價貴ければ費多く、交際繁ければわづらひ多し。世間は常に忙しく、さわがしく、人家稠密なれば、空氣も自ら不潔なり。總じて都會は衛生に宜しからず。まして火災の憂も少からざるをや。實に都會の生活は危險なりともいふべし。田舎には都會の如き繁華もなく、又都會の如き便利もなし。されど其の生活の心安きと、其の山水の清きと、其の人情の厚きと、其の空氣の爽なるとは、都會に求め難

きところなり。彼の春の花見、秋の紅葉狩は言ふに及ばず。夏の夕涼、冬の雪景色さへ、都會の人の深く羨む所なり。

彼の便利に代ふるに此ののどけさ、静けさあり。彼の繁華に代ふるに此の心安さあり。いづれを優れりとも定め難し。はでなる娛樂こそ田舎住居には乏しけれ、衛生上其の他の危險なきは、其の失を償うて餘りあるべし。都會には學問、藝術を始め、文明の利器、機關は總べてここに集れるを以て、知見を廣め、技能を磨かんとする者、又は新しき事業に従はんとする者は、田舎にのみ止ること能はざるべし。然れども父祖傳來の遺業を守り、安

靜に確實に生産を營まんとする者は田舎に永住するを良しとす。目的無きに都會に出て、其の惡風に染まば、大いに他日の悔を招くことあるべし。

第十六課 水遊び

夏の暑い日中、小舟を浮べて、涼しい風に吹かれながら、或は流のまに／＼、或は追手に帆を上げて、終日遊び暮すのは、海國男子にはふさはしい遊びである。水の上から陸の景色を見るのも面白いし、廣々とした水の上に浮んで、空行く雲の景色を眺めるのも、氣の晴々とするものである。

魚釣も亦好きな者には、此の上も無い楽しい遊びであ

る。釣竿をおろして待つて居る間は何事も忘れてしまふ。大きなのがかゝつて、しつかり糸を引いて居るのを、上手に釣上げる時は最も愉快である。白い腹を見せてはねて居る魚が意外に大きいので、そのまゝではとても上らない。右手に釣糸をあやつりながら、左手にすくひ網を引寄せる時などは、嬉しいやら、忙しいやら、實にたとへやうがない。

貝拾ひも亦面白い。引潮に洗はれた砂の上に馬刀貝の穴がある。それへ鹽を入れると、潮が來たと思つてか飛出す所を手早くつかむ。少しでも後れると、又穴の中へはいつてしまふ。さうすると深く奥へ／＼とはいつて、

五寸や一尺掘つても居ない。又馬刀貝の居ない處へ鹽を入れては、幾ら待つて居つても出て來ない。上手な人には、十五や二十はまたゝく間に取れるから、面白いではないか。

蛤はまぐりは砂の中へはいつて居るから、砂を掘ると取れる。中には随分見事に大きいのが取れることがある。それこそ本當の掘出物であらう。鮑あはぢは底の岩に附いて居るし、榮螺さきとは岩の間に居るから、素人には取れないが、黒人の取るのを見て居るのは、勇壯な見物である。一休みしよ、うと沖の方を眺めると、白いかもめなどが空をかけた、り、波の上に浮んだりして居る景色も、又なく美しい。

小さな子供は貝がらを拾つて遊ぶ。色もいろく、形もさまざま、珍らしい貝が數限りもない。一心になつて拾つて居る中に、波が來て袖をぬらすことがある。又せつかく拾つて、岩の上などに積んで置いた貝がらまでもさらはれてしまふことがある。

最も勇ましいのは水泳である。平泳ぎ、横のし、抜き手立泳ぎなど、様々な泳ぎ方を覚えて、友達同志互に競争するのは、一層の愉快である。一夏中、川や海に入りびたつて居て、皮膚が澀の利いた澀紙のやうな色になるのもうれしい。

第十七課 資本

産業ヲ興スニハ資本無カルベカラズ。野生ノ果物ヲ採リ、海邊ニ魚介ヲ集ムルガ如キハ勞働ノミニテ爲シ得ル生産ナレドモ、若シ一步ヲ進メテ、網ヲ投ジテ魚ヲ漁シ、弓ヲ射テ鳥獸ヲ捕ヘンカ、網及ビ弓矢ハ即チ其ノ生産ニ必要ナル資本ナリ。故ニ農業者ニトリテハ耕作ノ農具、種子、肥料、家畜ノ如キハ皆必要ナル資本ニシテ、工業者ニ取リテハ工場機械及ビ其ノ機械ノ運轉ニ要スル石炭等、皆其ノ資本ノ一部ナリ。サレバ資本トナルベキモノノ種類ハ甚ダ多ク、必ズシモ貨幣ノミニ限レルニ非ズ。貨幣ノミヲ資本ト考フルハ誤ナリ。

資本ヲ分チテ固定資本、流動資本ノ二種トス。固定資本

ハ幾回モ同ジ用途ニ充ツルコトヲ得ルモノヲイフ。例ヘバ農家ノ農具、家畜、工業者ノ工場機械ノ如キ是ナリ。流動資本ハ繰返シテ同一ノ目的ニ供スルヲ得ズ、一回ノ使用ニテ全ク消費セラル、モノヲイフ。農夫ノ田畑ニ蒔ク種子、牛馬ニ與フル飼料、工場ニテ使用スル石炭等ハ是ナリ。綿絲製造ニ要スル棉花ノ如キモ、一旦絲トナルトキハ棉花トシテ他ニ用フルコトヲ得ザルガ故ニ、流動資本トイフベキナリ。

固定資本ト流動資本トハ相待チテ其ノ効用ヲ現スモノニシテ、蒸氣機關ハ石炭ヲ得テ運轉シ、紡績機械ハ棉花アリテ綿絲ヲ作ルヲ得ルナリ。故ニ固定資本ト流動

資本トハ互ニ適當ナル比例ヲ保タシメザルベカラズ。然ラザレバ必ズ損失ヲ招ク。例ヘバコ、ニ一紡績工場アリ、數多ノ綿花ヲ買入ルトモ、工場ノ規模之ニ伴ナハザルトキハ、折角買入レタル多量ノ綿花ヲ使用セズシテ寢セ置カザルベカラズ。又其ノ規模ノ大ナルニモ關ラズ、之ニ相當スル綿花ヲ買入レザルトキハ、機械ノ一部ヲ運轉セズシテ遊バセ置カザルベカラズ。イヅレニシテモ其ノ損失ヲ免レザルナリ。

生産ノ資本タルベキモノモ其ノ使用ノ目的ニヨリテハ、資本ノ用ヲナサザルコトアリ。例ヘバ馬ハ耕作用運搬用トシテハ資本タルベケレドモ、競馬ノ如キ娛樂ノ

爲ニ使用スルトキハ生産ノ資本トナラズ。貨幣モ商品ヲ購入シテコソ資本トハナレ、物見遊山等ノ遊興ニ徒費シテハ生産ノ資本トナラザルガ如シ。

社會全般ヨリ見レバ生産ノ資本トハナラザレドモ、一私人ノ營利ノ目的ノ爲ニハ資本トナリ得ベキモノアリ。例ヘバ馬ヲ娛樂ノ爲ニ使用スルハ生産ノ目的ニハ合ハザレドモ、之ヲ賃貸スル所有主ハ之ニヨリテ利益ヲ得ベキガ故ニ、營利ノ資本ト稱シ得ベシ。又彼ノ劇場ノ如キモ生産的資本ニ非ザルコト勿論ナレドモ、其ノ所有者ノ爲ニハ營利ノ資本タルコト明カナリ。此ノ如ク私人ノ營利ノ目的ニ使用スル資本ヲ營利資本ト名

ツク。

營業ノ規模ノ大ナルニ隨ヒ、資本モ亦大ナルベシ。故ニ大ナル事業ヲ營マント欲スル者ハ必ズ大ナル資本ヲ投ゼザルベカラズ。常ニ事業ヲ擴張セント欲スル者ハ絶エズ資本ノ増加ヲ圖ラザルベカラズ。社會ノ生産ヲ目的トスル資本ニ於テモ、私人ノ營利ヲ目的トスル資本ニ於テモ、其ノ理ハ一ナリ。

第十八課 盲啞學校

久しく臺灣へ働きに行つて居たある大工の娘に、今年十一になるお徳といふ少女があつた。

生來の啞ゆゑ、教育もせずにおけば、一生すたり者にな

るのであつたのを、出入先のある陸軍少將の夫人が不便に思つて、大工の留守中、盲啞學校に入れて教育を受けさせた。

かたはの子程一入不便に思ふのは親心の常、父の大工は海山幾百里を隔てた臺灣にゐる間、夜に晝に娘のことを思ひ出さぬことはなかつた。然るに今度都合があつて一應東京へ歸つたので、新橋に着くと直ぐ其の足で、まづ恩人の少將夫人を尋ね、それから盲啞學校へ行つた。併し大工は無學文盲で、盲啞學校とはどうした學校か、委しくは知らぬのであつた。

學校は丁度休みの時間で、門の中には男女の生徒が集

つて遊んで居たが、目のあいた子供には一人も口をきくものは無い。どれもく手眞似ばかり、笑ふばかり、うなづくばかり。あゝ、此の子たちも皆お徳同様のかたはかと、大工は思はず涙をもよほした。

さて受付に來意を通ずると、やがて書記らしい人が出て來て、應接所へ案内し、しばらくお待ち下さい。といつて出て行つた。程なく一人の教師がお徳を連れてはいつて來た。お徳は洗濯ものながらさつぱりした着物を着て、見違へる程に成長して居た。

大工は嬉しさの餘り、思はずお徳か。とさけぶとお徳は「おとうさん。」と言つて、父の側へかけよつた。大工は驚い

た。啞が手眞似で互に意を通ずるといふことは、聞きもし、見もしたが、お徳が物を言ふやうになつて居ようとは夢にも思はなかつた。如何にも不思議でたまらないので、教師に尋ねると、教師は段々に啞に物を言はせるやうにする方法と、お徳が入學以來是迄になつた順序のあらましを説明して聞かせた。それから教師は手眞似で、お徳に色々なことを聞くと、お徳は一々それに答へる。聲の調子は十分安らかではないが、ともかくも明かに聞分けられる。

大工は一生のかたはとあきらめて居た自分の娘が、りっぱに物を言ふやうになつたのを見て、嬉し泣きに泣

● ● ● ● ●	● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ●
チ	リ	モ	ツ	モ	レ	バ	ヤ	マ

いた。それに又筆談ならば、口ではまだ言へないやうな複雑なことも話せる。算術、國語、裁縫なども習ひ覚え、あまつさへ級中第一の優等生と聞いて、大工は教育の力の貴いことと、教師の有り難いことに感じ入つて、其の教師に對して、幾度となく手を合せて拜んだ。

教師は尙十分に會得させる爲に、大工を案内して教室の様子を見せた。階上は盲生の教室、階下は啞生の教室である。盲生は點字といつて、畫學紙の面に突起させた點々の符號で、色の事を習ふ。指先でなでて、それを讀むので

あるが、熟練したものは随分達者に讀む。啞生に發音を教へるには、黑板の側に鏡があつて、生徒を一人づつそこに立たせて、教師自身の口の動き工合を示して、同じ様に口を動かし、音を出させるのが始である。教師は中骨の折れることであらうが、如何にも熱心に親切に教授して居る。さうして其の苦心の結果は着々あらはれて居る。現に昨年の卒業式にも、盲生が校長の告辭を其の場で點字盤で寫したのを、すらくと讀み、啞生がりつばに答辭を述べたといふことである。大工はこれを見て、お徳も亦かうして教育を受けたのかと感心し、校長にも面會して禮を述べ、せめてもの感謝のしるし

にと、自分がかせぎためた貯金の幾分かを、學校へ寄附した。

第十九課 言語

言語は人の感情を動かすこと最も強く、一言の不明より不測の誤解を生ずることあり。一言の誤解より十年の交情を破ることあり。言を發するに先だちて、能く其の言を選ばざるべからず。野卑なる言語を用ふるものは他人の輕侮を招く。言語は溫雅なるべし。特に婦人に於て然りとす。

情内に激すれば、言外に荒し。賣言葉に買言葉、つのりつゝのりて争鬭の種となる。眼を怒らし、口を尖らせて罵りさけぶは其の様見苦し。怒る時は默するに如かず。熱心其の度に過ぎて、徒らに聲を張上ぐる時は聽者の耳に入り難し。言語を發するには、常に心の冷靜を保たざるべからず。人は義理に服し、聲音に服せず。

「與に言ふべくして、之と與に言はざれば、人を失ひ、與に言ふべからずして、之と與に言へば、言を失ふ。失言は威信を傷つくること甚だし。寡言を貴ぶは多辯を戒めんが爲なり。多辯必ずしも戒むべきに非ず、饒舌を惡むのみ。饒舌なる人の口は禍の門なり。

徒らに他人の意を迎へて、感情を和げんが爲に言語の巧を弄するは其の心事の卑劣なるを知るべし。孔子曰

く、巧言令色、鮮し仁。」と。辯舌爽快なるも、心に誠實なければ、人を感じしむること能はず。言論拙劣なるも、誠意より發すれば、人を動かすに足る。至誠を以てして動かざるものは、未だこれあらざればなり。故に言は忠信を主とす。

孟子曰く、人の言を易くするや、責なきのみ。」と。言の貴きは之を行ふにあり。行はざるの言は無責任の言なり。其の言軽く、其の人卑し。故に、君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。大言壯語して自ら快しとするものは與に謀るに足らず。

博識をてらひ、所長を示さんが爲に發する言には、耳を

傾くるもの少し。此の人にして、此の際此の言なかるべからずと思はるゝ場合に發する言は、言々人をして傾聽せしむ。

相知らざる人多き處にては、務めて沈黙を守り、人の言をのみ聽くべし。貝原益軒と同船して、得意に經義を談じ、後益軒の名を聞きて赤面したる青年を思へ。

人と語る時、己獨り喋々するは禮に非ず。人をして多く言はしむべし。其の所長を聞くは我に於て益あり。人の言を横取し、又は人の言未だ終らざるに、我が言をさしはさむが如きは非禮の最も甚だしきものなり。能く人の言を聽き終りて然る後おもむろに應答すべし。

我が前に我を稱揚する言には、耳を傾くることなかれ。我が前に我を抑制する言をば、迎へ聴くべし。良薬は口に苦けれども、病に利あり。忠言は耳に逆へども、行に利あり。

第二十課 熱帯地方の果樹

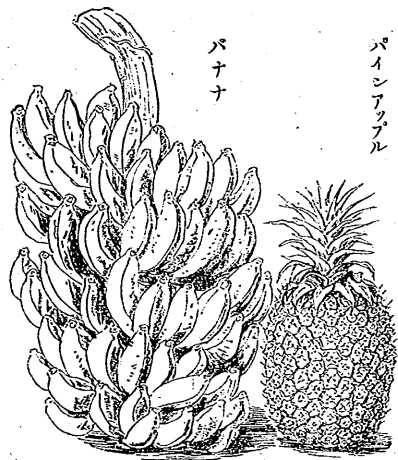
氣候・風土の異なるに随ひて、植物にも亦種々異様のものあり。特に熱帯地方に産する植物には、高さ六七十尺の樹幹の根より梢に至るまで、太さを同じうするものあり。長さ二十尺以上に及ぶ葉を有するものあり。枝より氣根を生じ、氣根は垂れて地に入り、樹幹の一部とされるが如きものあり。其の奇異にして而も一種の趣致

あること、全く想像の外に在り。果實にも珍しきもの頗る多く、バナナ・パイナップル・龍眼等、我等の食卓に上るもの亦少からず。

バナナは芭蕉はせをの一種なり。成長速なるものなれば、新芽

パイナップル

バナナ



の發生より數月を出でずして、多汁の葉莖は互に包合して太き幹を成す。其の長くして廣き葉は、脈理不完全にして、うすく柔かなれば、輕風にすら絲の如く裂く。包合せる葉莖中より、

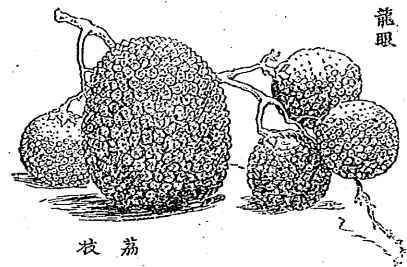
一莖高くぬけ出で、莖をめぐりて層々結實し、百箇以上の房を附くるものも珍しからず。重さに堪へずして、いつしか下垂し、房の逆立せるは奇觀なり。果實熟するに至れば、葉莖は次第にしほみて枯死すれども、根部より新芽を生じ、程なく成長しては結實するを以て、數株を植置かば、絶えず其の實を食ふことを得べし。其の黄熟せるものは腐敗し易きが故に、遠地には青き中に切取りて輸送するなり。

パインアップルは厚く且堅くして鋭く尖れる葉の、萬年青の如く四出せる株の中央に、一莖一果を結實するを常とす。其の外觀は松かさの如く、周り一尺五寸に及ぶ

ものあり。廣き畑一面に植並べたるパインアップルの紅黄色に成熟せるは目ざむるばかり美し。甘美の中に酸味を帶び、且水分多ければ、渴を醫するには此の上なき良果なり。

半熱帶地方より熱帶地方にかけて、つやゝかなる深綠色の葉がくれに、黄金色を見せて、枝もたわゝにザボン・オレンジ・レモン・佛手柑などの結實せるはあかぬながめなり。特に周り二尺にも餘るザボンの、幾百となく鈴なりになれるさまを見ては、よしや橘の枳に化する例はありとも、一樹を移し植ゑんと思はぬ人はなかるべし。

龙眼



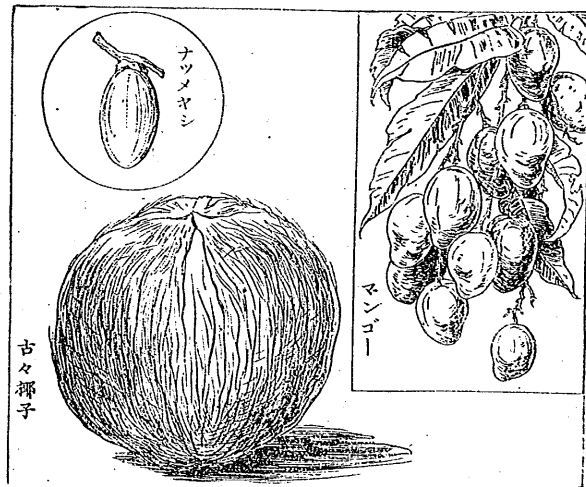
荔枝

龙眼も亦半熱帯地方より熱帯地方にかけての植物なり。其の繁茂せる枝毎に、梅の實よりも稍、小さき圓形の實を結ぶ。外皮と核との間に、白色半透明の肉あり。いはゆる龍眼肉なり。肉の味甘美にして上品なり。生にても乾しても食ふべし。乾せば白色の肉は暗色に變ず。荔枝の實は形龍眼に似たれども、これよりも大きく、味は龍眼に似て一層上品なり。龍眼・荔枝の乾したるは、支那の醫方には缺くべからざる藥品なりといふ。マンゴーは印度・馬來地方特産の一なり。果實の大きさ

は略むべに似たり。中に長くして堅き核あり。やゝ異臭あれども、液汁多く、味頗る甘美なり。たゞ成熟せるものは極めて腐敗し易くして、永く保存すべからず、遠く輸送すべからざるは甚だ惜しむべし。されば四方に領土を有して、日不没の國と稱せらるゝ英國のビクトリヤ女帝の食卓は、各殖民地に産する珍果もて、斷えず飾られしかども、印度産のマンゴーのみは終に御膳に上すことを得ざりきといふ。

椰子の種類は甚だ多し。就中最も有用なるは古々椰子なり。古々椰子はもと熱帯亞米利加の産なれども、特に熱帯亞細亞に多く栽培せらる。其の成長速にして、種子

發芽の後四五年を経れば、能く實を結ぶに至る。高き樹頂には二十尺以上もある葉ありて、あたかも大なる鳥の翼を張りたるが如し。果實は纖維質の皮を以て包まれ、内に堅き殻を有して頗る大なり。殻の内面には、白色にして油を含める果肉層あり。肉層内の空處に透明無色の液體ありて、味



甚だ美なれば、熱地の飲料として殊に好し。又殻は水呑其の他種々の器具とすべく、果肉より採れる油は食料とすべく、藥品とすべく、又燈火とすべし。印度馬來地方にては多く古々椰子を栽培し、主として果實を收穫す。セイロン島に於ても其の栽培盛にして、島民の貧富は其の栽培する茶と椰子との多少に因りて判すべき程なりといふ。

聚椰子は根より梢に至るまで一枝なく、幹の太さ殆ど一樣なり。發芽後凡そ七八年目に始めて果實を生ず。七十年若しくは百年間生育し、此の間斷えず實を結ぶといふ。實の中に長く堅き核あり。成熟すれば、香氣ありて

味甚だ美なり。亞弗利加の沙漠を旅行するものは、乾したる實をたづさへて、數百里の行程中の主要なる食物とす。又アラビヤ人は乾したる實を粉にし、之を少量の水にうるほして食用に供す。

第二十一課 象狩

印度のセイロン島で、土人が象狩をする方法は頗る面白い。先づ象の居る森林を選んで、其の近處の立木を其のまゝ柱にして、大きな柵を造る。最も大きい柵になると、周圍數哩にわたることもある。其の一處には狭い入口を開けて置く。柵が出来上ると、大勢の土人がてんでにたいまつを振りながら、象の群を遠卷にして、段々と

柵の方へ狩りたてる。象の群はたいまつ之光を見て、驚いて逃出す。さうして段々柵に近づいて來ると、竿や槍を持つてゐる土人が、一齊に吶喊の聲を舉げて、竿でそこらあたりをたゝいたり、槍を振つたりする。象の群は益驚きうろたへて、何處かに逃口はないかと探し廻る。そこへ幸ひ柵の間に、一處すき間があるので、象の群はよい逃口だと思つて、恐ろしい勢で皆其の中にかけ込む。ところが逃口と思つたのは、土人がかねて開けて置いた柵の入口である。象の群がすつかりかけ込むと、土人は其の入口を閉ぢる。象はまんまと土人の計略に乗つたのである。

是から土人は、此の柵に閉ぢこめた象を、一匹づつ外へ誘ひ出すのであるが、それには四五匹の馴れた象を、をとりに使ふ。其の象は土人がかつて之と同じ方法で捕へて、よく飼馴したものである。

さて馴れた象が柵の中の象を一匹誘ひ出すと、土人は直に入口を閉ぢる。誘ひ出された象は逃げようと思つて暴れ出す。それを馴れた象が四方から取巻いて、長い鼻で其の象の體を軽くたゝいて、色々となぐさめる。それで其の象は段々静かになつて、やさしい親切らしい同族と一處に歩くやうになる。土人は其の後をつけて行つて、大きな木の下まで行くと、不意に丈夫な象はを

象の足に投げかけて、木にくゝり附けてしまふ。馴れた象はまた柵の中にある他の象を誘ひに行く。くゝられた象は之を見て、後を慕つて頻りにあせる。けれども行くことが出来ないで、大聲にうなつて、大きな木も根こぎにされるかと思ふ程に暴れ廻る。

其の時土人は象の好きな椰子や木の葉などを持つて来て食はさうとする。象は初の内はそれをはね飛ばしたり踏みにじつたりして、中々食はうとしないが、腹が減つて来るのにたまりかねて、そこらにちらばつてゐるものを一つ食ひ二つ食ひ、遂には土人の皿に盛つて来るものまでも喜んで食ふやうになる。

かうして四五日も経つ内には、象は段々おとなしくなつて、飼主の命令に従つて、色々な仕事をするやうになり、又をとりの役をも務めるやうになる。

第二十二課 傳染病

傳染病中最も悪性にして、禍害の劇烈なるものは虎列刺^{ウサリチ}、赤痢^{セキリ}、腸窒^{チウシツ}、扶私^{フシ}、痘瘡^{トウサウ}、發疹^{ハツシツ}、窒扶私^{シツフシ}、猩紅^{シヤウコウ}、熱實^{ネツジツ}、扶埵^{フテ}、里亞^{リヤ}、ペストの八種にして、若し是等の病にかゝれば、法律の規定する所に従ひ、傳染病院又は隔離病舎に於て療養を爲し、居宅及び患者の使用したるものは總べて當局吏員の指揮の下に消毒せざるべからず。

虎列刺の病原はコンマ狀細菌なり。もと印度地方に發

生し、しばく世界に大流行を來せり。我が國には文政五年の頃大流行ありしを始とし、印度、支那地方より輸入せらるゝを常とす。此の病は胃腸を侵すものなれば、患者の吐瀉物、殊に大便に病原菌を有し、不知不識の間に、下水、井水、河水等に混じ、飲食物に附着して傳染するに至る。されば完全なる水道の設ある都市に於ては、水道の水を用ふべきは言ふに及ばず、井水、河水等を用ふる處にては、飲料水を始め、食器を洗ふ水に至るまで、必ず之をわかし、又はよくこして用ふべし。又暴食、暴飲、其の他未熟の果物等により、胃腸を損するは最も危険なりとす。

赤痢は全國にわたりて流行し、毎年二三萬人の患者あり。其の中死亡者は約五分の一の割合に達せり。是亦虎列刺と同じく、水及び飲食物より來るものなれば、水・飲食物・食器等に注意すべきこと、虎列刺に異ならず。されど病狀虎列刺の如く劇烈ならざれば、往々治療を等閑に附することあり。加之下痢の爲に衣類を汚し易く、しばしば洗濯を要するを以て、家族及び隣家に傳染するの患殊に多し。我が國にては地方の風習により、河流に衣類・便器を洗ひ、不潔物を流すものあり。是甚だしき惡習にして、若し病毒を混ざることあらんか、爲に幾萬の人命を危うする事なしとせず。

腸窒扶私は昔のいはゆる傷寒にて、其の發するは春秋二季に最も多し。全國患者數年々二萬餘人を算し、其中約五分の一は死す。病の初期は殆ど感冒に異ならざれば、傳染を受くる機會最も多し。故に熱の高き患者は豫め注意し、速に治療を求むるを良しとす。患者あらば隔離して養生せしむべく、其の汚物・衣類・寢具等總べて制規の消毒法を行ふべきものとす。

痘瘡は西曆一千七百九十六年、英國の大醫ジェンナー氏種痘法を發明せしより、豫防し易きものとなれり。爾後文明國に於ては、多く強制して種痘を行はしむ。我が國にても之が厲行に力むといへども、尙之を怠るもの少

からず、爲に年々多少の患者を出すは文明國民として恥づべきことにあらずや。現行の法律によれば、初生兒は出生より翌年六月に至るまでの間に於て種痘を爲し、若し不善感なる時は又其の翌年六月に至る間に於て更に之を爲す。之を第一期の種痘とす。次は數へ年十歳の時再び之を行ひ、若し不善感ならば、翌年十二月までに更に之を行ふ。之を第二期の種痘とす。然れども種痘の効力は大抵十年間なれば、其の後といへども、十年毎に行ふをよしとす。痘瘡を経過せしものといへども、決して油斷すべからず。かつて痘瘡にかゝりし八十歳の老人にして、種痘に感じたる例さへあればなり。

發疹瘰扶私及び猩紅熱は、いづれも皮膚に赤く發疹する熱病なるが、發疹瘰扶私は我が國には幸に稀なり。是等の病は患者より直接に傳染するのみならず、空氣中より傳染することあり。患者の衣類は十分なる消毒を爲さざるべからず。五箇月十箇月後に衣服より傳染したる例も少からざればなり。

實扶垓里亞は大人には稀にして、四五歳の小兒に多し。近年血清療法發見せられて、治療の効甚だ著しきものあり。爲に病の恐るべきを忘れ、患者の數は却つて從來よりも増加したる傾向ありといふ。小兒の多き家に患者を生じたるときは、健康兒にも亦豫防の爲に血清の

注射をなすを良しとす。患者の痰唾及び衣類寢具等の消毒に注意し、小兒又は小兒に接する人は、成るべく患者に近づかしむべからず。

ペスト豫防上深く注意すべきは家鼠のペストなり。鼠はペスト菌に對する感受性最も強く、病菌に接する機會あれば、直ちに之に感染し、遂に人類に傳染する危険あり。故にペスト豫防の第一手段は、鼠を驅り盡して其の危険を防ぐにあり。蚤は本病の媒介をなすこと多きが故に、蚤の發生せざる様清潔にするも亦豫防上必要なる事とす。又此の病は創傷より入ること多ければ、身體に創傷ある時は、傷口を外氣に觸れざる様にすべし。

以上八種の急性傳染病の外、結核癩トラホーム・マラリヤ等も亦傳染する病なり。結核の肺に起れるは世にいふ肺病にして、患者の咯痰中にある病菌の飛散するより傳染す。癩は昔は遺傳病とのみ思ひしが、今は傳染病たること明かになれり。病原菌は鼻汁濃汁等の中に在り。或人の計算に據れば、患者の一日に排泄する痰中には、七十二萬の菌を有すといふ。豈恐るべきにあらずや。トラホームの病原は患者の目より出づる脂に在り。故に人の手拭を借りなどして傳染すること多し。注意せざるべからず。マラリヤは世にいふおこりなり。此の病は蚊の媒介するものなれば、之を避くるには、蚊にさ

れざる様にすべし。

第二十三課 馬の忠義

一。谷の坂落しに九郎義經の奇功を奏したるは、軍馬の健脚の力に依れり。單騎河を渡りて、敵陣に斬入りし謙信の敢勇、目に餘る大軍をかけ散して、身に十七創を負ふまで奮闘せし正成の忠誠、馬よ如何ばかり其の主の名譽を發揮せしぞ。ハンニバルもナポレオンも、軍馬の助なくんば、如何てかアルプの險を越え得べき。古來征戰の功は軍馬に負ふ所多し。

戰地に於ける軍馬の任務は甚だ多端なり。兵器彈藥糧食を運び、敵情を探り、命令を傳ふる等、一に其の力を借

らざるなし。砲兵隊の馬が重き砲と砲手とを載せて、凹凸はげしき山坂を越え、泥土膝を没する惡路を過ぐる時、其の勞苦察するに餘りあり。銃砲の響、地を動かし、呐喊の聲、天にとゞろくたゞ中、敵陣めがけてまつしくらにかけ入る騎兵の馬や、鞍上の人と共にもとより生還を期せざるべし。

一。谷の戰、秩父次郎重忠は、日頃は汝にかゝりき。今日は汝を勞らんといいつゝ、三日月といふ愛馬を負ひて、險坂を下りしは情ある武士の美談として、今も世に傳ふる所なり。こゝに又日露戰役中、忠義なる軍馬の主人を救ひし奇談こそあれ。賽馬集偵察の時の事なりき、我が

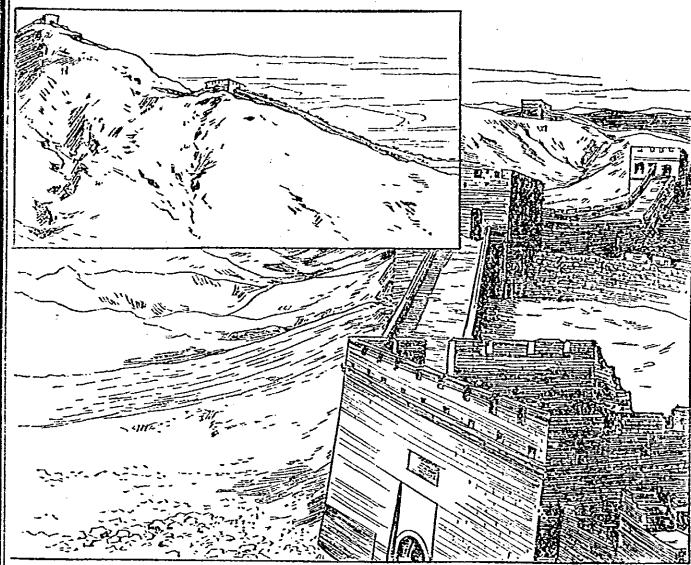
斥候の一隊、敵をみとめて本隊に報告せんとて退却する際、傳騎の某上等兵は左の肩を射撃せられ、しばしは其のまゝに進行せしが、遂には痛手に堪へかねて落馬し、人事不省となりて路上に横たはれり。其の中何者とも知れず、ずる／＼と我を引行く心地せしに、やがて木の根にて腹部を打ち、我に返りて目を見開けば、小菊といふ我が愛馬の、えりをくはへて草むらの中へ引込みたるなりき。

こは不思議なりと思ふまもあらせず、鐵蹄の音高く響きて、七八騎の敵兵通り過ぎたり。敵を見送り、小菊はうれしげに、二聲三聲高くいな／＼く。こゝに上等兵は始め

て悟りぬ、其の愛馬の敵兵の追撃を知りて、負傷せる主人を草の中へかくしたるを、感極りて落涙數行、馬の首に取付きて、男泣きに泣きたりとぞ。

第二十四課 萬里の長城

萬里の長城は、支那の北部にあり。東、山海關より起り、西、嘉峪關に至りて盡く。其の間高山を越え、深谷をわたり、廣原を横切りて、蜿蜒七百餘里に及ぶ。城壁の主なる處は、外面を煉瓦又は石塊にて疊み、内部を土にて埋む。高さ凡そ二丈五尺、厚さ一丈五尺。其の上は轡くわを並べて騎行することを得べし。六十間毎に方形の櫓やぐらあり。煉瓦にて造り、高さ五丈。城と櫓との上部には凹凸の胸壁を設



けて、敵を射撃するに便せり。
 今より二千數百年前、支那は戰國の世とて、諸侯分争して天下亂麻の如し。北方の胡人此の機に乗じて、しばしば内地に侵入せしかば、北部に位せる秦趙燕の三國は、各國境に城を築きて、其の侵

入を防げり。其の後秦王遂に諸國を一統して皇帝となるに及び、永く胡人侵入の患を絶たんとて、さきに秦趙燕の築きたる城を修繕し、尙新に増築して、いはゆる萬里の長城を成せるなり。之が爲に使役せる人夫數十萬人、數歲の日子を費したりといへば、其の大工事なりしこと推して知るべし。今存するものは秦帝の造りしもののみにあらず、其の後幾度か修繕改築したるものなりといふ。

秦帝の長城を築けるは外敵の侵入するを防がんが爲なりき。然れども書を焚き、學者を坑にする等の暴政擧げて數ふべからず。故に自ら始皇と稱して、二世、三世、統

を萬世に傳へんと期せしかども、死後未だ幾ばくならざるに、天下再び亂れ、僅かに二世にして漢の世と成れり。支那の詩人が、

不知禍起蕭牆內。虛築防胡萬里城。

と歌ひたるが如く、外敵を防がんと欲して長城を築き、内部に禍亂のきざすを知らざりしこそ笑止なれ。金城鐵壁の守ありとも、政令下に行はれず、國民心服せずんば、國家の安寧は期し難かるべし。

焉知萬里連雲勢。不及堯階三尺高。

第二十五課 共進會の模様を報ずる

手紙

拜啓、益御清福賀し奉り候。今回當市に於て開設致候關西府縣聯合共進會の模様、概略御報道申上候。

會場は停車場北方一帯の畑地にて、敷地の廣大なるは従前に無き所との事に候。其の規模は先年大阪に開かれたる第五回内國勸業博覽會にも劣らず候。

陳列場は本館を主なるものとして、之に工產物及び農產物を列ね、他に機械館、特許館、臺灣館等の設もこれ有り候。就中觀覽人の最も多きは第一區より第五區に至る工產物の陳列

にこれ有り候。先第一區は織物染物刺繡ししゅうの類に候。此の區内にて最も目立つは京都府の出品にて、さすがに織物の本場だけありて、西陣の高等織物刺繡の如きは、光彩陸離として目もまばゆきばかりに御座候。之に次ぐは東京府にこれ有り、八王子産は實用向絹物の主要産地たるに恥ぢず、色合縞模様かむように氣の利きたる出品多くこれ有り候。

第二區は陶磁器金屬製器具の類にて、愛知縣・岐阜縣の出品頗る多く、就中名古屋の陶器は其の進歩殊に著しく、石川縣の九谷焼と共に

最も人目をひき申候。次に富山縣の金屬製器具にも優良品多きは喜ぶべく候。又兵庫縣の板がらすは近來我が國に於て始めて製造を見るに至りたるものの由、總じてがらすの製造は近年著しく精巧に進みたりとの好評これ有り候。第三區は漆器・木竹製品もけしひんの類、第四區は日用雜貨類にして、石川縣の漆器は近來著しく進歩の評あり。静岡縣の漆器、岡山縣の花筵、香川縣の麥稈眞田、其の他高知縣・岐阜縣等の製紙も相應に人目をひき申候。

次に農産物の出品については米・麥・豆の類は

申すに及ばず、生絲、繭、蠶具の外、肥料、農具に至るまで、何れも各地の粹を集め、陳列にも中々意匠をこらしたるものも見受候へども、一般に此の種の出品物は外觀の美に乏しき爲、觀覽者の感興をひくこと少き様子に候。但し米、麥は國民主要の食料品にこれ有り、蠶絲は最も大切なる輸出品にして、心ある者の深く意を留むべき出品と存候。

又林産物も農産物と同じく外觀の美としてはこれ無く候へども、各種の木材を網羅せられ居り、殊に吉野林業の模^も型^{がた}に依りて、杉、檜の林

相より、伐木運材等の光景を一目に見ることを得せしめ、又館外には木曾御料林の木材運搬の状況を實演せらるゝ等、人智開發上にも多大の益あることと存候。

機械館特許館は我が國の機械工業が年毎に進歩するを證すといふの外、別段申上ぐる程の事もこれ無く候へども、臺灣總督府の經營に係る臺灣館に至りては、熱帶特産の珍品に富み、大いに人氣を博し居候。

本館の正門附近に幾十百の賣店相並びて、相應の賣上あり、又毎夜全館に點ずるイルミネ

一シヨンは壯觀を極め候。其の他旅順館等の如き興行物あり、三十七八年戰役に於て、我が海軍が旅順を襲撃したる光景を寫し出し、頗る好評にこれ有り候。其の中御くり合の上御來觀如何に候や。別封記念繪葉書一組進呈仕候間、御覽下され度候。不備。

九月十二日

石川 勉

野田耕作殿

第二十六課 四季の月

春は景色やゝとゝのふ梅の時節よりも、櫻の花盛なる程、照りもせず、曇りも果てぬおぼろ月夜にこそ、一刻千

金の價はあれ。

大原や蝶の出で舞ふおぼろ月。

晝の熱さを洗ひ流したる夕立の空さりげなき月は、海邊にて見んに如くものあるべからず。金波萬里の光に對ひては、いつか夜の更行くをも忘るゝなるべし。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、

くものいづこに月やどるらん。

露しげき千草の野邊、夜すがら鳴明す蟲の音を添へて、秋の月はあはれ最も深し。

白雲に羽うちかはし飛ぶかりの

かざさへ見ゆる秋の夜の月。

冬の月のさえ渡りたる夜は、かねの音も一しほ身にしてみて、冬木立の影墨繪の如くあざやかなり。

寒月やわれひとり聞く橋の音。

第二十七課 盗人を誡む

平安朝の頃袴垂はかまだれといふ盗賊あり。十月の末肌寒ければ、善き衣もがなと、月のうすき夜半處々をうかひあるきしに、狩衣着たる男の唯一人笛吹きて來るに會へり。此の人こそ我に衣得させんとて出で來る人なるべけれど、走りかゝりてはがんと思ふに、何となく物恐ろしくて取掛り難し。二三町が程從ひ行くに、其の人我が後に人ありと思ふ氣色もなし。いよく笛を吹きすまし

て行く。心を決して足音高く飛掛らんとすれば、笛吹きながら見かへりたる氣色まことに恐ろし。幾度か取掛らんとすれども、取掛り難し。十餘町ばかりもつきて行きしが、今はかうよと刀を抜きて切掛れば、此の度は笛を吹止めて、何者ぞと叱りたる一聲、身も縮むやうに覺えて、思はず地にひざまづく。何者ぞと再び問はるゝまに、我は盗賊の大將軍袴垂なりと答ふれば、さる者ありと聞けり。我に従ひ來れと言ひながら、復前の如く笛を吹きて行く。今は逃ぐとも逃すまじと、鬼に捕へられたる心地して、遂に其の人の家に行きぬ。何人かと思へば、當時武勇の名かくれなき藤原保昌なり。家の内に入

りて、綿厚き衣一枚取出し、之を取りて行け。え知らぬものに渡り合ひて過すな。とて與ふ。かほどの恐ろしかりしことは無かりき。と、袴垂が捕へられて後に語りけるとぞ。

こゝに又支那の後漢の世に陳寔ちんしよくといふ人あり。或夜其の家に盗人忍び入りて、梁の上にかくれ居たり。寔之を知りて、家の人々を集めて、容を正しくして諭すやう、人たるものは、自ら勉めて惡を去り、善に遷らずばあるべからず。不善の人と雖も、初より惡なるにはあらず。唯習性を成して遂に不善に至れるなり。彼の梁上の君子を見よ。と指ざし示すに、盗人驚きて梁より飛下り、寔の前

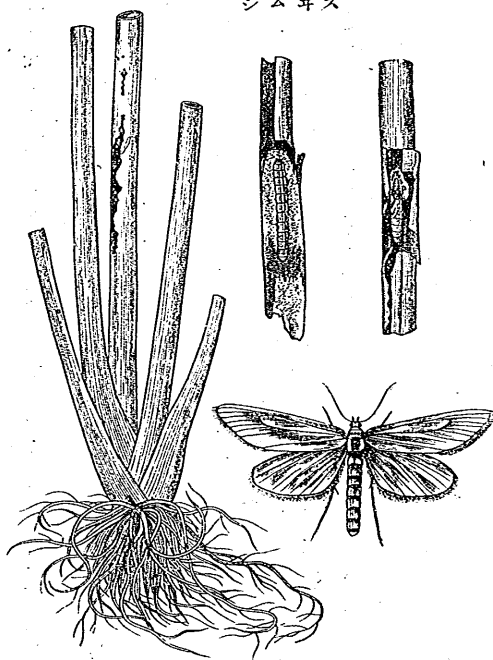
にひざまづきて罪を謝す。寔あはれみて、盗人に向ひていふやう、熟汝の顔かたちを見るにもとよりの惡人にはあらず、貧しさの餘り此に至れるならん。今より志を改めて人となるべし。といひて、絹二匹を出して與へしかば、盗人は涙を流して去れり。此の事を傳へ聞きたりけん、寔の縣には盜賊遂に跡を絶ちたりといふ。

第二十八課 害蟲と益蟲

至りて小さき蟲も、其の勢力は侮るべからず。一夜の中に農作物を食盡して、農夫が一年の辛苦をも無にすることあり。

稲作に大害をなす蟲類には、螟蟲めいしよく・浮塵子うじん・螟蛉めいれい・葉捲蟲はまきむし・椿椿つばき

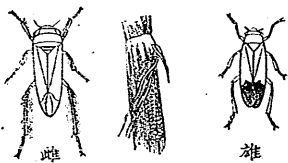
シムキズ



ざる處少し。浮塵子は稻の莖葉の養液を吸ひて大害を與ふ。多く稻につきたる時は、あたかも糠を散したる如く、收穫を皆無ならしむることあり。

象泥蟲・蟲蠹等あり。此の中螟蟲は稻の生育期中、葉鞘部より莖心部を蝕害して、稻を枯死せしむ。全國其の害を受け

(大) カンウ



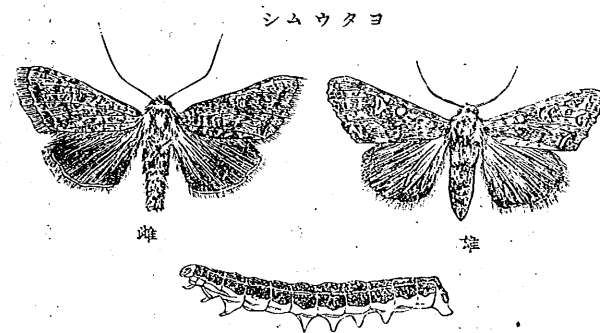
尺蠖は桑果樹等を侵し、特に夜間、桑の幼芽及び葉を食荒すを以て、蠶業家の大敵なり。

呀蟲は蔬菜果樹を始め、殆ど總べての植物を害ふ害蟲にして、其の種類甚だ多く、大小色澤等一樣ならず。繁殖最も盛にして、植物の養液を吸収し、衰弱せしめ、遂に枯死せしむることなきにあらず。

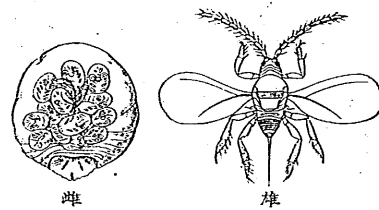
地蠶は夜間侵害をたくましうするを以て、夜盜蟲の名あり。好んで豌豆を侵す。亞麻・大麻・蕎麥の類、又總べての蔬菜類も其の害を被る。

天牛かみきりにも亦種類多し。果樹・桑樹・林木等皆其の害を受く。成蟲は銳利なる口器を以て、樹幹の表皮に孔を穿ち、各孔に數箇づつ産卵す。幼蟲は初め皮部より蝕入し、幹部に達して大孔を穿つ。

此の外大根・蕪菁等を侵すひめこがねさるはむしかぶらばち・もんしろ蝶・瓜類を侵す瓜蠅等あり。又綿蟲及び貝殼蟲は林檎・梨・桑其の他の果樹・園樹を侵して、繁殖力最も速なり。蠶を害する



(大放) シムラガヒカ



蟲の最も恐るべきは蠶蛆かいこうしなり。養蠶家は注意せざるべからず。害蟲の中には大群團を成し、移住して慘害をたくましうするものあり。飛蝗ひぐわ類是なり。一日凡そ十五六里を飛行す。若し順風に乗ずる時は、優に百五六十里に達することを得。其の群行するや、天日爲に暗く、羽音數里の遠きに聞え、其の降下するや、樹幹裂け、小川せかれ、地上數寸、唯蝗蟲の積重るを見る。かくて一地を食盡して他地に移り、萬頃の綠野をして、

(大放) ジウノコヒカ



一朝にして焦土に等しからしむ。
害蟲あれば又益蟲あり。益蟲の中
には蠶天蠶柞蠶蜜蜂五倍子蟲の
如く、我等の爲に必要な生産物
を供給するものあり。又瓢蟲蠟螂
の如く、他の害蟲を捕食し、まつむ



しこぬかばちかもどきばち馬尾蜂螟蟲蜂の如く、他の
害蟲に寄生し、間接に我等の利益をなすものあり。蜻蛉
の幼蟲は水中の子々を食ふを以て、蚊の驅除には大効
あり。蜻蛉には、むぎわらとんぼやんまおはぐろとんぼ
とうすみとんぼ等、其の種類百有餘。いづれも害蟲を驅
除する功能あるものなれば、みだりに捕獲すべからず。
害蟲は其の繁殖盛なるを以て、少しにても母蟲の存す
る間は、蔓延し易し。故に害蟲驅除は共同して行はざれ
ば、其の効なし。驅除の方法としては、點火誘殺捕殺卵塊
採收驅除劑使用等種々あり。

第二十九課 スバルタ武士

昔希臘にスバルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尙高し。而してスバルタ人の教育の方法と生活の状態とを聞くものは、此の聲譽の偶然にあらざるを知るべし。

スバルタ人は悉く武士にして、男子生れて七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子王族といへども、家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操、武術、劍舞、軍樂等にして、讀み書きの如きは、餘力を以て之を學ぶに過ぎず。

教育所に於ける少年青年の生活は、専ら廉潔質素克己

高讀一

忍耐の氣象を鍛鍊するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なるものなりき。寝ぬる時は、僅かに一枚の敷蒲團しきぶたんを用ふるのみ。其の蒲團は河邊の蒲がまの穂を集めて、自ら之を作らざるべからず。衣服は重着を許さず。冬も尙はなしにて、靴を穿つを得ず。毎日河水に浴して、温湯を用ふることなく、食物も亦極めて粗惡にして、飽食すること許されず。是他日戰場に出でて、飢渴に耐ふるの習性を養はんが爲なり。

言語は簡明を貴び、饒舌を誠む。故に今日に於ても、西洋諸國にては、言語の簡單明白なるをスバルタ人の答といへり。又謙讓と從順とはスバルタ武士の最も重んず

る所にして、長幼の序正しく、未成年者は路を行くにも、
両手をマントの下に入れ、視線を地上に垂るゝを禮と
し、揚々濶歩するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒
するの權利を有し、懲戒を受けたる未成年者、若し之を
其の父兄に告ぐる時は、父兄は更に之を懲戒するの義
務あり。

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて、公民
の列に入る。而も武藝の練習は終生之を怠るべからず。
公式祭儀の席には、老若相合して武勇の歌を誦す。老人
先づ聲を上げて、我等は嘗て武勇なる壯者なりき。と歌
へば、壯年之に次ぎて、我等こそ今はそれなれ。知らぬも

のはいざ試みよ。と歌ふ。少年亦之に和して、我等はやが
て更に武勇なる壯者たるべし。と結ぶ。

かくの如き尙武教育に鍛はれたるスバルタ武士は、死
を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、
玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つ
るを以て無上の名譽とせり。

こゝにスバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき
二三の美談を記さん。

敵の軍勢山野に満ち、大小の軍旗空をおほひて、天日見
えずとの報に接し、大將自若として曰く、然らば其の陰
に戦はん。

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで曰く、敵勢大なれば、我等の名譽も亦随つて大なり。一將又曰く、我等は敵軍の數を知るの要なし。唯其の所在を知るべきのみ。

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずるものあり。將軍叱して曰く、敵、我に寄するに非ず。我、敵に寄するなり。

スバルタ人の忠勇義烈なるは、獨り男子のみに非ず。女子も亦此の美德を分てり。一婦人其の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰く、勝ちて持歸れ。然らずんば、之に乗りて歸れ。

或時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり來り

高讀一

て之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞きて、喜んで曰く、我が子は祖國の爲に之を産めり。又或時の戰に討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍に陥りたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、私に其の子の武運拙くして、祖國の爲に死する能はざるを悲しめり。

第三十課 母の愛

一

鐵のくさりをかみ切つて、

獅子ししはをりよりをどり出づ。

たてがみ風にふるはせて

ほゆる一聲雷か。
人々あわてふためきて
迷惑ふ聲かまびすし。

二

家々急ぎ戸を閉ぢて、
街は人の影も無し。
遊びに心奪はれて
残る幼子唯一人、
逃げよの聲も聞入れず、
あなやと人々さけぶのみ。

三

高讀一

高讀一

牙かみならし暴獅子あれじしの
飛掛りたる一刹那、
髪ふり亂しまつしくら
走り出でたり、子の母は、
止むる人を押退けて、
子を救はんの一心に。

四

たけり立つたる猛獸も
しばしたじろぐ其のひまに、
鋭き牙をまぬかれて、
子は救はれつ、傷もなし。

母の慈愛の念力は
實に獅子よりも強かりき。

五

高き窓よりすき間より
をのゝきふるひ眺めたる
人は始めて安堵しつ。
子を持つ母は皆いへり。
「かゝる時には我等亦
かくぞあるべき、子等の爲。」

高等小學讀本 卷一終

高讀一

15140.8-2-1

2130.8

170

明治四十三年十一月十五日
明治四十三年十一月十八日
明治四十三年十一月十九日
明治四十三年十二月三十一日
印刷
翻刻
翻刻
翻刻
發行

著作權所有

著作兼
發行者

文 部 省

定價金拾壹錢

高等小學讀本 一

明治四十三年十一月十一日
文部省檢査濟

(一七五二)

翻刻發行
兼印刷者

大阪市南區難波荻原町千百十八番地九
大阪書籍株式會社
代表者 三木佐助

印刷所
大阪市南區難波荻原町千百十八番地九
大阪書籍株式會社

發賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社
國定教科書共同販賣所

